

「多文化防災」の協働モデルづくり 報告書



はじめに

財団法人仙台国際交流協会では、近い将来に宮城県沖地震の発生が確実視されるなかで、災害時言語ボランティアの運営や外国人住民への防災啓発等、「多文化共生」の視点に立ったさまざまな防災プログラムを実施してまいりました。

2011年3月11日に発生した東日本大震災においては、当協会は仙台市からの要請を受け、発災当日より仙台国際センターを拠点として「仙台市災害多言語支援センター」の運営を行いました。

仙台市災害多言語支援センターでは、電話、インターネット、ラジオ放送、避難所巡回等を通じて、多言語による情報提供や外国人被災者の相談対応を行い、4月末日でいったんの活動を終了いたしました。未曾有の大災害のなかで行われた私どもの取り組みには、一定の成果はあったものの、今後に残された課題も多々あったかと存じます。

仙台市災害多言語支援センターの運営終了後、当協会では仙台市災害時言語ボランティアの活動ふり回り会、外国人被災者へのアンケート調査、関係機関・団体への震災時の実態についての聞き取り、「多文化共生」の視点から考える地域防災の研究会など、さまざまな取り組みをおこなってまいりました。

この報告書が震災直後から全国のみなさまよりいただいたご支援に多少なりとも恩返しになれば幸いです。

みなさまのご協力に感謝申し上げますとともに、外国人にも、誰にとっても、安全・安心な地域づくりが一層推進されることを願います。

財団法人仙台国際交流協会

目次

「『多文化防災』の協働モデルづくり」事業 報告	3
1. 「『多文化防災』の協働モデルづくり」事業について	4
2. シンポジウム「『多文化防災』の新たな展望 ～東日本大震災での外国人支援について考える」報告	5
2-1. 基調講演「災害時にいかされた『顔の見える関係』 ーラジオでの多言語情報提供」	6
2-2. パネルトーク「多文化の視点から見るこれからの防災 ー『多文化防災モデル』の提案」	10
3. 「多文化防災」モデル事業研究会	18
4. 東日本大震災における関係機関等へのヒアリング結果の概要	19
資料編	29
1. 財団法人仙台国際交流協会（略称：SIRA）について	30
2. SIRA の防災事業	30
3. 仙台市災害多言語支援センター活動報告	31
4. 東日本大震災における外国人被災者アンケート 集計結果	35
おわりに	48

「『多文化防災』の協働モデルづくり」事業 報告



シンポジウム「『多文化防災』の新たな展望」のパネルトーク

1. 『多文化防災』の協働モデルづくり事業について

目的

日本における外国人住民に対する防災啓発、災害時外国人支援の取り組みは、1995年の阪神・淡路大震災以降、その必要性が自治体や国際交流協会で認識され、全国で行われています。

財団法人仙台国際交流協会(SIRA)は2000年度から「仙台市災害時言語ボランティア」の運営を始め、その後、地域防災訓練への参加、多言語防災情報の発信(多言語防災DVDや多言語防災リーフレットの作成、ラジオ局との協働)等、包括的な取り組みを行ってまいりました。2009年度にはSIRAの災害時の外国籍市民を支援するこうした取り組みが評価され、(財)消防科学総合センター等主催「第14回防災まちづくり大賞」において消防庁長官賞を受賞しました。

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、仙台市の要請にもとづき仙台市災害時言語ボランティアをはじめとする市民らの協力を得て「仙台市災害多言語支援センター」を運営しました。

震災から半年が過ぎ、仙台市災害時言語ボランティアをはじめとするSIRAや仙台市のこれまでの取り組みの有効性を検証するため、(財)自治体国際化協会の助成を受け、本事業を行いました。

「多文化防災」について

「多文化防災」という表現は一般的に使われているものではありませんが、本事業では「多文化防災」を次のように捉え、協議を重ねました。

- ・ 「多文化共生」の視点にたった地域防災。
- ・ 外国人といった国籍や文化の異なる人々を一概に「要援護者」としてとらえるのではなく、むしろ地域の担い手として考え、実践する地域防災。
- ・ 多様な担い手の協働による安全・安心な地域づくり。

『多文化防災』の協働モデルづくり事業の構成

本事業は主に3つの取り組みで構成されました。

(1) 関係者、関係機関へのヒアリング

「多文化共生」の視点にたった今後の地域防災のあり方の参考とするため、外国人住民や関係機関・団体等に震災時の実態をヒアリングしました。

詳細については19ページ以降をご参照ください。

(2) 「多文化防災」モデル事業研究会の開催

研究者、行政、地域の担い手らと協働で「多文化共生」の視点から防災事業および災害時支援の有効性を検証しつつ、「多文化防災」のモデル事業づくりを行いました。

詳細については18ページをご参照ください。

(3) シンポジウム『多文化防災』の新たな展望～東日本大震災での外国人支援について考える』の開催

詳細については5ページ以降をご参照ください。

なお、本報告書では紙面の都合等により第I部のみ詳細を掲載しました。ご了承ください。

2. シンポジウム

『多文化防災』の新たな展望～東日本大震災での外国人支援について考える』報告

日時： 2012年2月12日(日)13:00～17:00

場所： 仙台国際センター 中会議室「白樺1」、レセプションホール「桜2」

主催： 仙台国際交流協会

後援： 仙台市



第Ⅰ部

1. 挨拶

池田規子(仙台国際交流協会副理事長)

2. 報告「仙台市災害多言語支援センターの活動と外国人被災者アンケート」

菊池哲佳(仙台国際交流協会企画事業課主事)

3. 基調講演「災害時にいかされた『顔の見える関係』—ラジオでの多言語情報提供」

板橋恵子氏(Date fm パーソナリティ)

4. パネルトーク「多文化の視点から見るこれからの防災—『多文化防災モデル』の提案」

パネリスト

朝間康子氏(仙台市立三条中学校教頭)

今野均氏(片平地区連合町内会会長)

馮雷氏(仙台地区中国学友会会長)

コメンテーター

柴山明寛氏(東北大学大学院工学研究科附属災害制御研究センター助教)

コーディネーター

佐藤剛(仙台国際交流協会企画事業課課長)

第Ⅱ部

5. 分科会①ラウンドテーブル「ボランティア活動を語る—「多文化防災」の視点から—」

話題提供者

遠藤弘望氏(仙台市災害時言語ボランティア)

佐藤登氏(仙台イスラム文化センター代表)

早川敏氏(仙台市ボランティアセンター副所長)

コーディネーター

菊池哲佳(仙台国際交流協会企画事業課主事)

6. 分科会② パネルトーク「団体間のネットワークを通じた多言語情報提供支援」

パネリスト

土井佳彦氏(多文化共生マネージャー全国協議会理事)

内藤稔氏(東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター特任講師)

コーディネーター

須藤伸子(仙台国際交流協会企画事業課企画係係長)

2-1. 基調講演

「災害時にいかされた『顔の見える関係』—ラジオでの多言語情報提供」

板橋 恵子 氏 (Date fm パーソナリティ)

みなさま、こんにちは。板橋と申します。どうぞ今日はよろしくお願ひいたします。今日は30分ほどお時間をいただいて「顔の見える関係」が今回の震災でどのように役立ったかについて、お話しさせていただきたいと思ひます。

いま、須藤さんからもご紹介いただきましたけれども、2005年からSIRAにご協力をいただいて、毎月1回外国人の方に番組にご出演していただくことになりました。そもそも、先ほど池田さんのお話にありまして、この宮城にあっては30年以内に99%の確率で発生すると言われていて、いわゆる「想定宮城県沖地震」が年々ひしひと近づいているということがありました。メディアとしては、外国人の方というよりは、県民全体に向かって防災意識を高める役割を担うべきだと考え、2004年から毎週日曜日の朝30分間で、防災啓発番組「Sunday Morning Wave」をスタートしました。この番組では、昨今の防災の報道では必ずと言っていいほど出演なさっている、津波工学のご研究の世界的な権威でもいらっしゃる東北大学の今村文彦先生に毎週6~7分、さまざまな地震や津波、防災についてのお話をいただいています。今村先生のお話は、これまでに数百回に及びます。



板橋 恵子

私が2004年にこの番組に関わるようになって、防災啓発の点で番組をより良くしていくことを考えた時に、言葉の壁があり、災害時にはしばしば弱い立場に置かれがちな外国人の方のことを考えました。仙台市、宮城県内にはますます多くの外国人の方が住まわれるようになり、そうした人たちが災害時に困っている状況も目に見えましたし、多少なりとも外国人の方々に向けた情報を発信できないかと考えました。また、外国人の方にとっては、たとえ小さな揺れであっても、地震を体験したのは仙台にいらしてからが初めてだというケースもしばしばうかがっておりましたので、地震を体験した時になにを感じたのか、あるいは地震に対してどのように備えているのかといったお話をうかがいたいという私たちの興味もありまして、2005年11月から「Sunday Morning Wave」の番組内で「GLOBAL TALK」というコーナーを月一回設けて、スタートしました。

1回目のゲストはロシアからいらしたエレナ・ジンコフスカヤさんという方で、ロシア国内の自然災害や仙台での地震への備えについてうかがいました。当初は、ご出演いただいた方の母国語で防災に関するワンポイント・アドバイスをお伝えしていただいております。今日にいたるまで放送回数は70回以上に及び、出身国数で数えますと約30か国の方にご出演いただきました。仙台にはなかなかいらっしゃらないだろうなあと思われる国の方ですと、バングラデシュ、ルーマニア、イラン、シリア、アルメニア、トルクメニスタンの方々にもご出演いただきました。例えば、トルクメニスタンの方の防災ワンポイント・アドバイスはトルクメン語という、いままで耳にすることのなかった言語で印象的でしたし、その他にもペルシャ語、アルメニア語、ウルドゥー語といったそれぞれの国の言葉で毎月一回ずつ放送してまいりました。ただ、番組の放送時にその言語を母国語とする方がお聴きになることはなかなか難しいのではと考え、放送内容をまとめたものをCD-Rに収め、こちらの仙台国際センターにある「交流コーナー」で随時流していただく仕組みをつくりました。ですので、何らかの機会に仙台国際センターにいらっしゃる外国人の方が、ラジオを通じてお聴きになれなくても、こちらで防災に関するちょっとしたアドバイスを知ることができるかたちになっています。

そのような工夫をしながら番組を積み重ねてきましたけれども、出演したほとんどの方が来日して初めて地震を体験したとおっしゃっており、初めて地震の揺れを感じた時には、何が起きているのか分からなかったという感想をおっしゃいます。なかには、あたかも大きな怪獣が地中から自宅を揺らしているのではないかとい

う感覚に襲われたと感想を述べられた方もいらっしゃいました。ことほどさように、ほとんどの方が地震を初めて体験したとおっしゃるのですが、お話をうかがって感心するのは、その多くの方が次の地震が起きた時に困らないように「備えている」ということでした。母国を離れて仙台にお住いのみなさんなので、災害とは関係なく自分の身は自分で守るという意識が高いのかもしれませんが、防災に関しても確実に備えていらっしゃる方が多いように感じます。例えば、部屋の高いところに置いていた物は下に降ろしましたとか、懐中電灯やちょっとした食料を防災袋に収めて玄関に備えました、というお話をほんとうによく聞きます。その一方で、数年前の全国調査の報道でありましたように、地震の高い発生確率のわりに、宮城県民の防災意識は残念ながら非常に低いものでした。多くの県民が大きな地震が来ることは頭では分かっているものの、ほんとうの意味で身構えている、備えているとは言い難いものだったのだと思います。多くの日本人が災害に対してある意味楽観的に考え、あまり備えをしていないという実態がありながら、外国人の方はきちんと災害に備えていることは、70回以上の放送のなかで私が特に感心させられた点でした。

私たちが震災を通じてひしひしと感じたことは、自助・共助・公助と言われるなかで、残念ながら公助はあまり役に立たないということでした。それは公助に関わる方々も被災していますし、これだけ大きな災害になりますと公助の手がまわるまでたいへんな時間がかかりますし、まわりきらないということもあります。また、自助・共助がいかに大切かを日本人としても痛感させられたかと思います。外国人の方はあまり公助については期待しておらず、自助の意識が非常に強いかと思いますが、今回の震災において外国人支援という点でとても重要な課題として浮かび上がったのは、共助の視点だと非常に強く感じました。同じ地域に住む方どうしがいさつを交わし、「顔の見える関係」を築くことの必要性が浮かび上がったのではないかと感じます。

震災前には想定宮城県沖地震にいかにかに備えるかということがテーマだった「GLOBAL TALK」は、震災直後はしばらく放送をお休みさせていただいたものの、菊池さんの先ほどの報告にもありましたとおり、誰にでも必要な震災にまつわる生活関連情報を、少なくとも英語、中国語、韓国語という多くの外国人の方が共有できる言語で提供することが急務だろうということになり、震災直後から5か月間にわたっては「Sunday Morning Wave」のみならず、Date fm のいくつかの番組内で、常時、外国語による生活情報を発信してまいりました。その後、8月から「GLOBAL TALK」を再開しましたが、ご出演者にはこの震災をどう体験し、その後どのように行動なさったのか、あるいは震災から教訓としてなにを学んだかというお話を主にうかがうように進めています。

3月11日の当日にお話を戻させていただきます。あの日からあと一か月で一年を迎えようとしておりますが、私はあつという間の一年だったという思いと、逆に、あの日が一年よりもずっと前のことのようにも感じられていて、とても複雑な気持ちがあります。

あの日、Date fm はサテライトスタジオから生放送しておりました。ご存知のように地震発生後は県内全域で停電し、Date fm もシステムトラブルがあり、放送が10分間停波しましたが、放送をサテライトスタジオから本局に切り替え、3時ちょっと前くらいに電波が戻りました。地震発生時に私は局舎の3階にいて、揺れのあった時には身動きがまったくとれなかったのですが、揺れがおさまるとすぐに壁づたいに階段を下りて2階のスタジオに向かいました。スタジオに着いた時にちょうど電波が回復し、スタジオに入り無我夢中で対応しました。大きな余震も頻発し、外からの情報もまったく入ってこない状態でしたが、それまで7年間防災番組に関わるなかで自分の中に蓄えられた知識を総動員して「ビルから離れてください」、「運転中の方は車を路肩に寄せてほしい」といった内容の放送を続けました。

そのような時に、よもや私たちも考えていなかったのですが、SIRAのスタッフが外国人スタッフとともに局舎に駆けつけてくださったのでした。いま宮城で何が起きているのか、そしてこれから何に気をつけなくてはならないのかを一刻も早く外国語で情報提供したいと駆けつけてくださったので、打合せもそこそこに生放送に出させていただきました。まず私から日本語でお話し、その後に英語、中国語、韓国語でお伝えしました。その

後も、新しい情報が入るたびにスタジオに来ていただき、スタジオに到着するとすぐに外国語で情報提供するというのを何度も何度も繰り返しました。

日本人でさえも非常に不安な状況のなかで、外国人の方には日常会話の日本語がお分かりになっても、災害に関する報道には耳慣れない言葉がたいへん多く、どれだけの不安があったか想像もつきません。そのようななかで、多言語での支援に長年にわたって取り組んでこられたSIRAのみなさんが足を運んでくださり、ラジオでの多言語情報というメディアとしての役割を果たすことができました。

その後、だんだん状況が落ち着いてくるなかで多くの外国人の方が仙台から退避するということがありましたけれども、そのようななかでも仙台市や宮城県の被災者向けの支援の情報などを多言語で発信することを継続できました。どれだけのの方に情報が届いたのかは分からないのですが、このような情報は例えば週に一回放送している、あるいは一日のなかで数分だけ放送しているということでは外国人の方の耳にはなかなか届かないのですが、今回数か月にわたって英語、中国語、韓国語でいろいろな時間帯に発信するとともに、さらに毎日決まった時間に放送をおこなうことで、多言語放送のことが外国人の方の間で口伝えで広がり、お聴きになる方がずいぶん増えたとうかがいました。これは私たちにとっても大きな収穫でした。

実は、今日お話をさせていただくにあたって当時のメールのやり取りを見返したのですが、当時のSIRAのご担当だった高平さんのメールが残っていました。それらのメールでは、災害が起きてから災害情報を多言語化するのでは刻一刻と状況が変化する災害には対応できないので、最低限必要な、絞り込んだ防災情報を英語、中国語、韓国語でレコーディングし、Date fmに準備しておくことを相談しているところでした。また、3言語に加えて、さらに「やさしい日本語」も準備する必要があることを3月9日のメールには書かれました。ご存知のように3月9日には、今にして思えば3月11日の前震にあたる大きな揺れがありましたが、3月10日の高平さんからのメールには「昨日はたいへんな揺れでしたね。大丈夫でしたか」というお見舞いの言葉がありました。また、そのメールには次回の「GLOBAL TALK」ではその一か月前にニュージーランドのクライストチャーチで大きな地震があったことをご記憶かと思いますが、その後のクライストチャーチについてSIRAのケイレブ・ウリキさんにお話していただくことが書かれていたのです。その後、3月11日を迎えるわけですが、もっとあのやり取りを早めに行き、収録までできていれば、多言語での第一報もさらに早く行い、救うことができた人がいるかもしれないと悔やんでいます。

ですけども、そのような反省もありますが、おかげさまでSIRAのご協力もあって、ラジオで普通に外国語の情報を流すことが日常化できるころまでできています。これをもっとコンスタントにする必要があります。今回の震災では、コミュニティ・エフエムによる地域に密着したよりきめ細かい情報発信力の重要性が認識されていますが、幸い、宮城県内のコミュニティ・エフエムでも私どもと同じ音源を放送していただいております。私たちが震災後におこなったアンケートでも、震災直後は多くの方々がラジオからの情報を頼りにしてくださっていたという声が寄せられました。外国の方にとっても日本で何かあった場合にはラジオで最低限の情報が得ることができるということを意識していただければと願っています。

いまは「Sunday Morning Wave」の他に、最低限の情報に絞り込んだ防災に関する外国語情報を夕方6時からの生放送の中で放送しています。これまでは津波に関する外国語情報がなかなか発信できていなかったのですが、今回は地震と津波の両方について同じ割合で放送しています。また40秒のピンポイントの防災情報を英語、中国語、韓国語でそれぞれ6タイプ作成し、番組と番組の間で放送することを検討中です。それによって、外国の方も防災知識を少しずつ蓄えていただければと考えています。また、みなさんのお手元にお配りしておりますが、小冊子『サバメシ防災ハンドブック』を作成しました。今回の震災では「想定外」という言葉がずいぶん聞かれましたが、昨今の気象状況の変化などを考えますと、また私たちの予想を超える災害がどこで起きるか分からないですし、それに対してどう備えるかという情報を盛り込みました。5万部を作成し、ラジオなどを通じてお配りしていますが、お申し込みくださったみなさんがおっしゃることは、自分の身

は自分で守らなくてはならないことを今回の震災を体験してつくづく感じた、ということでした。なかには、またいつか起きるかもしれない津波に備えるためにも女川で被災した両親に小冊子を渡したい、という方もいらっしやいました。23 ページには、外国人の方向けに外国語での情報も、大変少ない情報ですが、掲載しておりますのでお役にたてていただければと思います。

私たちはこの災害ではほんとうに多くのものを失い、10年、20年といったスパンを見据えなくてはほんとうの意味での復興は実現できないと思っています。被災された方々のご経験を無駄にしないで、次の災害にどう身構えて、備えていくかが大切です。いわゆる多重防災によって、少しでも被害を軽減する「減災」にどう結び付けていけるかということが、外国人の方への発信も含めて、これからの課題だと思っています。

限られた時間ではありましたが、日ごろからの「顔の見える関係」がいかに大切か、お話させていただきました。ありがとうございました。



「サバメシ防災ハンドブック」

2-2. パネルトーク「多文化の視点から見るこれからの防災—『多文化防災モデル』の提案」

パネリスト

朝間 康子 氏(仙台市立三条中学校教頭)

今野 均 氏(片平地区連合町内会会長)

馮雷 氏(仙台地区中国学友会会長)

コメンテーター

柴山 明寛 氏(東北大学大学院工学研究科附属災害制御研究センター助教)

コーディネーター

佐藤 剛(仙台国際交流協会企画事業課課長)

佐藤 みなさん、こんにちは。仙台国際交流協会企画事業課長の佐藤です。さっそくですが、パネルトークを始めたいと思います。今年度に SIRA が開催した「多文化防災」モデル事業研究会ですが、学校、地域、行政、仙台地区中国学友会、仙台イスラム文化センター、多文化共生マネージャー全国協議会、東北大災害制御研究センターの十数名で構成しまして、事務局を SIRA が務めました。メンバーはときどき代わりまして、メンバーは必ずしも組織の代表ではありません。ここで話し合った内容ですが、一言で防災と言っても非常に幅広いのですが、今年度は避難所における「多文化共生」、あるいは「多文化共生」の視点での防災訓練等のあり方を主なテーマに協議しました。逆に、主に外国人住民に対する情報提供、例えば発災直後の情報提供については今年度の研究対象からは外しました。本日のパネルトークでお話するパネリスト、コメンテーターは、みなさん「多文化防災」モデル事業研究会のメンバーです。それぞれ自己紹介を兼ねて震災の体験、感じたことをお話しください。



佐藤 剛

朝間 みなさん、こんにちは。国際交流会館の側にある三条中学校から参りました朝間康子です。当日の学校の様子をお話したいと思います。三条中学校では翌日に卒業式を控えておりまして、1年生と2年生がその準備にあたっておりました。在校生は 200 名ほどおりましたが、それぞれの場所で準備していましたので、地震発生時に生徒の安否を一度に確認できる状態にありませんでした。揺れがおさまるまでの間、それぞれの生徒は教師の指示のもと、鞆で頭を被って落下物に気をつける、机の下にもぐるなどして、身を守りました。私は子どもたちの様子が見える場所にいたのですが、子どもたちが伏せたりしている様子を確認しながら、いつまでこの揺れは続くのだろうと不安を募らせておりました。揺れがおさまってから生徒たちを校庭に避難させ、全員の無事を確認することができました。すでにその頃から保護者の方が生徒たちを引き取りにいらっしやったのですが、だいぶ寒くなってきましたので、生徒たちにはいったん武道館へ移動してもらいました。本来、生徒たちは集団下校してもらう計画でしたが、周囲の状況もまったく分からず、そのような状況で下校させるのは危険を伴うということで、保護者の方へ引き渡しすることにしました。ただ、仙台に戻って来られないという保護者の方もいらっしやって、武道館で一泊する生徒もおりましたが、翌日には全員の引き渡しすることができました。生徒の引き渡しをするなかで、地域の人たちが学校に避難していらっしやいました。そのなかには外国の方もいらっしやいました。地域にはこれだけの外国の方が住んでいたのだなと改めて実感しました。校長の指示で、体育館と武道館を避難所としました。夕方には町内会の方々もおいでになり、その後の避難所運営にも協力していただきました。感謝申し上げます。



朝間 康子

今思えば、あの時にあつれば良かった、こうすれば良かったと思うことがたくさんありますが、地域の方々と協働で防災訓練をしていたこともあって、すぐに子どもたちに仮設トイレを組み立ててもらい、5台設置しました。夕方からの炊き出しに備えて、備蓄庫にあった物資を体育館のステージの方に運んだのですが、それも中学生たちが一生懸命に手伝ってくれました。炊き出しの準備の間も、生徒の引き渡しや地域の方々の避難の受入を同時並行で行ったのですが、教職員が中心となってそれらにあたりました。先生方には、予想外のことも多々ある状況のなかでも適切に対応していただき、感謝しています。1,000名以上の方が避難していらっしゃいましたが、外国の方はおそらく同じ国どうしの方で集まって避難し、情報交換をしている様子でした。学校では、学生ボランティアを募り、食料や水の配給を行いました。外国の方も多かったこともあり、学生ボランティアの方に日本語と英語で避難所運営に関するアナウンスをしていただきました。安否の確認のために掲示板を設置し、情報交換できるようにしましたが、入ってくる情報が非常に限られており、私たち自身もとても不安でした。残念ながら3日後に通電による火災が発生し、避難所を閉鎖せざるをえなくなりましたが、留学生をはじめとするボランティアにはお世話になりました。現在は通常の教育活動が行われており、生徒たちは元気に活動しています。今日はこのシンポジウムに参加させていただき、私が分かっていることは情報提供したいと思いますし、私自身も「多文化防災」の展望を考えていきたいと思ひます。どうぞよろしくお願いしひます。

今野 こんにちは。片平地区連合町内会の今野です。初めにお断りしておきまひますが、私はこのような大勢の方の前でお話したことがないものですから、あまりうまくお話できないかと思ひますが、よろしくお祈い申し上げます。さて、どうして私がここでお話することになったかと考えまひすと、実は、私たちの地域では連合町内会を核として片平地区まちづくり会を発足させており、3月11日から片平小学校と片平市民センターで組織的に避難所を運営してきまひました。その後、9月20日に23ページにわたる避難所運営の報告書を仙台市に提出しまひました。その報告書のなかには外国人対応についてのことも触れてあるのですが、そのような経緯からこの研究会にもメンバーとして参加させてもらったのだと思ひます。当初は、アンチ行政、アンチ留学生ともいえるような立場で話していたのではないかと思ひます。

3月11日の話をしまひすと、私は自宅で被災しまひました。片平地区連合町内会として活動してはいますが、町内会単体では花壇大手町町内会に所属しており、最初は花壇大手町町内会の集会場に向かひました。集会場に向かう時にも、屋根瓦が落ちてはいる家や広瀬川のがけが崩れてはいるなど、かなりひどい被害状況が見られまひました。被害状況をまとめることと、安否確認することを役員に伝えまひました。町内会には避難所に行きたいという人もおり、その方たちを連れて片平小学校に向かひました。16時30分頃だったと思ひますが、すでに1,000人くらいの人たちがいて驚きまひました。その多くはいわゆる帰宅困難者と呼ばれる人たちで、地域の人たちはその一割程度だったと思ひます。初日は学校の先生方に乗り切ってもらふこととして、片平地区連合町内会としては自転車各町内会を回って、翌朝の10時に校長室に集まるように役員たちに呼びかけまひました。翌朝の10時には連合町内会の8つの町内会、市民センター長、校長先生、PTA会長らが集まって話し合ひ、各地域の被害状況を確認することや今後の対策を考えるために今後も毎朝10時に集まることを決めまひました。その会は4月9日まで続き、避難所運営は3月いっぱいまで行ひました。その後、それらの記録を残そうということになりました。4月9日までの記録をまとめるとともに、各町内会や避難所のことを第三者の視点でまとめてもらおうということになり、片平地区まちづくり会をコンサルティングしてくれてはいるNPOに依頼し、各町内会や避難所の関係者に約2か月間ヒアリングしてもらひ、この報告書にまとめまひました。この報告書は多くの方々に見てはいるのですが、SIRAでも報告書が目にとまり、研究会に誘ってもらったのだと思ひます。



今野 均

馮雷 みなさんこんにちは、仙台地区中国学友会の馮雷と申しひます。現在、東北大学理学研究科環境地理学修士2年です。今日、私は留学生の一人として地震に対する感想をお話したいと思ひます。私は地震の当日は海外調査のためにタイに20日間滞在してはいるところでした。日本に帰ったのは3月14日です。中国

大使館からは多くの中国人留学生が新潟に避難していると聞いて、私も3月15日に新潟に向かいました。3月15日には新潟空港に200人くらいの中国人留学生が集まっていた。その夜にも仙台からのバスが来て、1,000人くらいの中国人留学生が集まりました。留学生は新潟市内のひとつの避難所で過ごしました。私は3日間の避難所生活の後、3月18日にハルビン行きのチャーター便で中国に帰りました。地震の体験が少ない留学生は、避難所でとても不安な様子でした。また、留学生たちがもっとも心配していたことは原発事故のことでした。これからの「多文化防災」を考えた時に、はじめて日本に来る留学生に対して防災訓練の重要性の強調や、安全教育の推進がとても重要だと思います。



馮雷

柴山 こんにちは。東北大学災害制御研究センターで助教を務めます柴山と申します。今回はコメンテーターという立場でお話させていただきます。まず大学という立場でお話させていただきますと、東北大学には1,000人ほどの留学生、100～200人の外国人研究者が在籍しております。仙台市には約10,000人の外国人登録者がおりますが、約1割が東北大学の関係者となります。私は震災後の約一か月間、大学の災害対策本部にいましたが、留学生の安否確認の方法など、さまざまな課題がありました。特に原発の問題があり、留学生たちがそれぞれ退避したのですが、先生方が留学生たちの動向を即座に把握できなかったという状況がありました。また、研究者という立場でお話させていただきますと、今回は沿岸部に比べて内陸部の被害は小さかったわけですが、もし内陸でも大きな被害があれば避難所運営等にさらに混乱が生じたことが予想されます。また余震については、マグニチュード7クラス、8クラスの余震が発生する可能性がありますので、「多文化防災」の取り組みが近い将来に役立つこともあるかもしれませんし、東海地方などの他地域で参考になる部分もあるかもしれません。その意味でたいへん重要な研究会だと思います。



柴山 明寛

佐藤 今回の研究会では避難所における「多文化共生」がひとつのテーマだったわけですが、それについて研究会で話し合われたことをなぞるようなかたちで進めたいと思います。まず、多くの外国籍身市民が避難した避難所運営についてどのような課題を感じたのか、実際に避難所運営に関わった朝間さんと今野さんのお話を聞かせてください。

朝間 やはり心細くて集まられた方が多いのと、安心を求めて避難所に集まられた方が多かったと思います。自宅からある程度の食料をお持ちになれる方も多かったので、避難所に備蓄していた食料については先を見通してうまく分配して、3日間程度であれば問題なく運営することも大丈夫かと思います。ただ、今回運営を経験した者がいれば避難所はスムーズに運営できると思いますが、そうでない場合や避難生活が長期化した場合には難しいこともあると思います。

佐藤 今回避難所運営を経験した教職員がいれば、3日間程度であればうまくやっていたのではないかと、というお話ですね。今野さんはいかがでしょう。

今野 これについては発災直後と長期化した場合に分けて考える必要があると思います。発災直後は外国人の方も不安で集まってくると思いますし、食料が必要だということもあります。発災直後は外国人も日本人も

ありません。人道的にも避難所に来た人は誰でも受け入れなくてははいけませんし、実際にそのように受け入れました。しかし、長期化してくると問題を感じました。それは外国人の方々が避難所のお客さんであり続ける、といったことがありました。つまり、私たち 50~60 代の者が炊き出しなどを長期的に行っている一方で、留学生らが避難所に食べに来るだけ、寝に来るだけ、といった状態が見られました。もっとも、留学生に限らず日本人にもそのような人がいたわけですが、外国人避難者については文化の違いもあり、長期化した場合には避難所を別にした方が良いのではとも思いました。例えば大学が避難所として留学生を受け入れるということも考えられるのではないかと思います。

佐藤 避難所運営が長期化した場合に、外国人被災者がお客さまとなっていて、運営側を見ると運営者は高齢化しているところに矛盾を感じたというお話ですね。以前にもうひとつ今野さんにおうかがいしたのは、外国人被災者の独自のネットワークが強くて、外国人被災者が特定の避難所に集まってしまうというお話があったと思いますが。

今野 そうですね、私たちは避難所を組織的に運営しまして、例えば PTA のみなさんが大掃除をしてくださったりしたのですが、私たちの認識としては避難所というのは地域の避難所という感覚がとても強かったのです。体育館はこの地域の人、ここはこの地域、といったように。ところが、外国の方は同国人どうして集まります。どうしても言葉が通じる人どうして集まるのは分かりますし、私たちが外国で被災したら同じようにはなるだろうなということも思うのですが、やはりもう少し地域とうまくやれないものかな、ということも思いました。

佐藤 「言葉の壁」や「文化の壁」がある外国人被災者が、言葉の通じやすい人どうして集まってしまう。これは当たり前と言えども当たり前なのですが、ネットワークを活かして特定の避難所にどんどん集まってしまう、ということがあるということですね。これは三条中学も同じだったと思うのですが、朝間先生いかがでしょうか。

朝間 三条中学にも地域外の方々がだいぶ集まるということがありました。おそらく、こっちに居るからおいで、というようなことがあったのだと思います。

佐藤 仙台市以外からご来場の方のために補足しますと、三条中学校の側に東北大学の国際交流会館という建物があり、そこに多くの留学生が住んでいるのですが、会館を出た後も会館の近くにお住まいになる留学生が多いようです。また、長く住んでいる方にはこの地域に店を出すケースもあります。外国人住民の「散在地域」と呼ばれる仙台においてもこの地域に比較的多くの留学生とその家族が住んでいます。それもあって、三条中学校が外国人の避難所のようなになったということだと思います。片平小学校も近くに東北大学があるので、同じようなかたちだと思います。さて、先ほどに元気な若者が被災者となる一方で、他方町内会が支援者となる避難所の矛盾のお話がありましたが、外国人被災者は支援されるべき存在なのかということを考えていると思います。仙台市の防災計画でも外国人は要援護者という位置づけになっていますが、確かに言葉の面ではそうかもしれませんが、マンパワーとしての外国人という意味ではどうなのでしょう。

朝間 先ほど日本語と英語でアナウンスしてくれたという話をしましたが、やはり外国の方がその役を買って出てくれて、避難所の運営のルールなどを話してくれました。本校の ALT も積極的に活動してくれました。しかし、その時に、外国の方にそれ以上に運営を担っていただくという発想がありませんでした。今にして思えば、同じように避難していて、同じように力を出し合えば、もっと良い避難所運営ができたのではないかと思います。私たちが実はあります。私たちがそのような視点が欠けていたと思います。

佐藤 そのあたりについて、外国人被災者は支援されるだけの存在か、という点で、馮雷さんからお話いただけないでしょうか。

馮雷 留学生は若い人が多いですし、例えば、荷物を運ぶとか、救援物資を配るなどして自発的に避難所運

営を手伝え、みんな助かると思います。

今野 その通りだと思います。3月11日は学校が春休みになっていました。実際に地域の力になってくれたのは中学生や高校生だったのですね。私たちは毎年、防災訓練を行ってきたわけですが、反省をしています。と言うのは、防災訓練には外国人住民や大学生も参加してくれていたとは思いますが、私たちが計画したとおりに参加してもらっていただけだったと思うのです。例えばここで地震体験車に乗ってくださいよとか、ここで濃煙体験をしてくださいよとか、こちらで炊き出したものを食べてもらうとか。いわば訓練に参加してもらっていたものの、お客さんあつかいしていたのですね。訓練の時から積極的に参加してもらおうようなかたちにしておかないと、実際に災害が起きてもお客さんになってしまうのは当然だな、と感じています。

佐藤 確かにその通りかもしれませんが、どのように参加を呼び掛ければ良いのかということが難しいかもしれませんね。

柴山 外国人住民に参加してもらうためには、やはり積極的に情報提供して安心して参加してもらえるようにする必要がありますと思います。

佐藤 先ほどからお話に出ているように、災害が起きた時に外国人の方が安心や情報を求めて特定の場所に集中してしまうということがありました。もともと、私たち日本人も外国で被災すればまったく同じかと思えます。私たちが震災後にヒアリングした関係機関のなかに、大韓民国総領事館があります。総領事館では災害時に避難所となることは想定していなかったのですが、震災時にはたくさんの韓国人が総領事館に避難してきて、実際に避難所になってしまったということでした。また、この会場にもいらっしゃいますが、仙台イスラム文化センターの代表の方にもうかがったところ、日頃から仙台イスラム文化センターはイスラムの方の集まる場所だったわけですが、震災時にはイスラムの方の情報の集まる場所であり、心の拠り所でもあったということでした。馮雷さんは中国学友会の会長ですが、仙台に住む中国人留学生の方々には、集まる場所があるのでしょうか。

馮雷 中国人留学生は三条町の国際交流会館に多く住んでいますが、八幡地区にも多いです。近い場所に住んでいますので、東北大学の国際交流会館に避難施設があれば、集まりやすいと思います。

佐藤 そうすると外国人向け避難所を設ければ良いのではないかと、という話になってくるかもしれません。私たち国際交流協会の立場としては「多文化共生」として、言葉や国籍の別なく避難した方が良いという立場なのですが、馮雷さんとしては外国人向け避難所があった方が良いということになりますか。

馮雷 個人的な意見ですが、日本に来たばかりの留学生もいますし、日本に長く住む留学生もいます。日本に来たばかりの留学生が日本人と同じ避難所に行くと言ったほうが良いと思いますが、日本に長く住む留学生だったら日本人と同じ避難所でも大丈夫だと思います。どちらも難しい部分があると思います。

佐藤 外国人向け避難所と言うと外国の方を分けてしまい、それで良いのだろうかという気がしますが、馮雷さんのお話ですと両方あっても良いのではないかとということになりますでしょうか。地域の避難所に行くことももちろん良いと思うし、言葉が通じないということで外国人どうしが集まることのできる避難所があっても良いということですね。柴山さんから補足していただけますか。

柴山 地域に根差した外国人の方であれば地域の避難所に



行ってもらうのが良いとも思いますし、言葉の面で不安な人だとか、外国人旅行者のためには外国人向けの避難所があると良いのではないのでしょうか。研究会でもお話ししましたが、大学がその機能を担えると思います。大学は留学生をケアする必要があります。また、多言語で対応できるスタッフもおりますし、領事館等と連携して情報を提供することができると思います。他地域に避難させるにしても、バスなどを受け入れるための十分な敷地もあります。

佐藤 ありがとうございます。それ以外にも具体的なお話が今野さんからあったと思いますが、よろしいでしょうか。

今野 はい、避難所運営と同じくらい大切なことが、地域の在宅要援護者の支援です。在宅要援護者の支援は、地域外からのボランティアでは難しく、常日頃から接している民生委員や社会福祉委員のような方が望ましいです。顔見知りの人であれば安心して頼みごとができます。顔見知りではない方に、買い物を手伝ってくださいとお金を渡す、ということは難しいわけです。しかし今回は、どちらかというと高齢の方が多い民生委員などの地域の人たちが避難所運営を中心にやってもらい過ぎてしまった、と思うわけです。避難所運営は、避難してきた人たちが自主的に運営する組織づくりが必要だと思うのです。そうでないと、地域の人たちは在宅要援護者の支援などに手が回らないのです。避難所に避難する人たちには、外国人の方もいるでしょうし、学生もいるというのですが、そうした人たちが避難所を運営できるように HUG(ハグ)のような訓練が必要だろうと思っているところです。具体的には、3 月には青葉区社会福祉協議会にも協力してもらって行う予定ですし、来年度には片平キャンパスにも協力してもらって、留学生にも参加してもらって実施したいと考えているところです。

佐藤 すみません、私の方で勘違いがあって、今のお話はモデル事業案のところでおうかがいする予定でした。ちょっと話を戻しますと、外国人向け避難所の必要性についてですが、馮雷さんのおっしゃるように両方あっても良いかもしれませんが、ただ、誤解されると困るのですが、外国人の方はみな、どこか一か所に集まってもらえば良いという話ではなくて、地域の避難所に避難してもらってももちろん良いですし、外国人向けの情報が必要な方、特に日本に来たばかりの方については集まれる場所があっても良いのではないかと、というお話だとご理解いただきたいと思います。

さて、具体的な「多文化防災」モデル事業案ですが、研究会ではスライドのように考えました。3 つを考えました。1 つは、外国人も支援の担い手として参加してもらう仕組みづくり、です。2 つめには、マニュアルでは対応できない災害への備えとしてのネットワークづくり。3 つめとして、仮称ですが「多文化防災」コーディネーターの育成、です。

外国人も支援の担い手として参加してもらう仕組みづくりについてですが、今野さんからのお話がありましたが、外国人被災者が避難所でお客さんになってしまわないように日頃の訓練での工夫が必要です。そこで、外国籍市民もゲーム感覚で参加できる訓練を実施してみてはどうかというご提案ですね。これまでの防災訓練ではどちらかというとシナリオが出来ていて、しかし実際の災害ではシナリオ通りいかないわけです。また、これまでの防災訓練では主催者がおぜん立てしてしまっていて、参加者はお客さまというかたちなのですね。先ほどに菊池の説明からもありましたとおり、仙台には外国籍市民に占める留学生の割合が非常に高いので、災害時には共助のマンパワーとして期待できますし、防災訓練で積極的に参加し、考えてもらえるような工夫が必要だと思いました。そのひとつの例として、静岡県で開発された HUG があります。仙台市内でもすでに実施されているところもあります。必ずしも HUG である必要はありませんが、いわゆる参加型の訓練が求められます。外国籍市民に訓練への参加を促すとともに、外国籍市民が訓練の企画に参加してそこに町内会も協働するといったかたちがあっても良いのかと思います。その際に言葉の問題があれば国際交流協会が通訳の派遣をするなどで協力したいと思っています。

2 つめのマニュアルでは対応できない災害への備えとしてのネットワークづくりですが、先ほどもお話ししたとおり、外国人被災者は情報や安心を求めて、同じ国や文化の人たちで集まる傾向があります。集まる場所として、韓国総領事館、仙台イスラム文化センター、大学ですとか、日本語学校なども考えられると思います。

災害時に備えて、そうした場所や外国籍市民のキーパーソンとの日頃からのネットワークづくりが必要だと思います。このあたりについて震災では SIRA がちょっと弱かったところかもしれません。震災時には避難所等を巡回して直接情報提供するとともに、領事館やイスラム文化センターなどにも情報提供していましたが、その連携がもっと深くても良かったのではと思います。また迅速かつ正確な情報提供の必要性という点で、支援する側である行政やエフエムラジオ局との地域のネットワーク、同時に東京外国語大学や多文化共生マネージャー全国協議会といった地域外とのネットワークが必要です。このあたりは日頃からのネットワークがあり、比較的うまくいった部分かと思いますが、今後も強化していきたいと思います。

3 つめの「多文化防災」コーディネーターの育成ですが、先ほどもお話がありましており、町内会の方々は避難所運営以外にもやるべきことが多く多大な負担がかかりますし、学校の先生方も生徒たちの安全確保など担うべきことが多いです。そこで、「多文化共生」の視点をもって防災訓練など企画に参加してくれたり、実際に災害が発生した場合には避難所運営などをサポートする人材がどうしても必要ではないかという話になりました。実は、この提案者は柴山さんなのですが、補足していただけますか。

<p style="text-align: center;">多文化防災モデル事業案</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 外国人も支援の担い手として参加してもらう仕組みづくり 2 マニュアルでは対応できない災害への備えとしてのネットワークづくり 3 (仮称)「多文化防災」コーディネーターの育成 	<p style="text-align: center;">ゲーム感覚で参加できる防災訓練</p> <p>たとえば、静岡県が開発した「HUG」</p> <p style="text-align: center;">H(避難所)、U(運営)、G(ゲーム)</p> <p>避難者の年齢や性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験するゲーム。参加者が意見を出しあったり、話し合ったりしながらゲーム感覚で避難所の運営を学ぶことができる。(静岡県地震防災センターHPから)</p> <p style="text-align: right;"><small>* 仙台市内でも、駒川口つかの地域では実施されています。</small></p>
--	---

柴山 1～3 番の項目をすべてまとめて申し上げますと、顔の見える関係をつくりましょう、ということがテーマになっています。日本人が外国人に歩み寄る、外国人が日本人に歩み寄る、そういう場づくりが「多文化防災」コーディネーターの役割だと考えています。また、避難所運営にあたっては地域の人と集まってくる外国人被災者をつなぐ役割も求められます。防災においては、防災リーダー・プログラムといったプログラムがいろいろあるのですが、大切なのは、平常時からコーディネーターが機能してなくてはならないということです。その意味では、日本語学校の先生や学校の英語の先生などが平常時から「多文化防災」コーディネーターの活動に参加していただき、災害時には避難所運営等をサポートするというのが望ましいと思います。年間に数十人でも誕生すれば素晴らしいのではないのでしょうか。

佐藤 ありがとうございます。時間が迫ってきましたが、最後に一言いかがでしょうか。

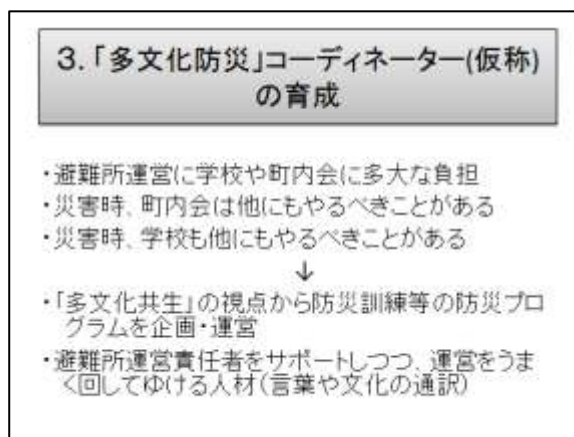
朝間 中学校の生徒たちも今回の体験を通じて今後に必要なことを考えていると思います。いまだしたらまた災害が起きたとしても対応できると思いますが、これが何年も先となると分かりませんので、今回の経験を次ににつないでいかなければならないと思います。その点で、子どもたちができること、担えることも多いと思います。それを学校で整えていくことも考えたいと思います。

今野 先ほども申し上げましたが、避難所運営も重要ですが、在宅要援護者の支援や安否確認のことも考えていかななくてはなりません。また、そのための名簿作りの際には個人情報保護法との兼ね合いも考えなくてはなりません。また、最近では、マンションへの対応も課題となってきました。それらを考慮して、総合的に防災を考えていきたいと思っています。

馮雷 「多文化防災」を考えた時に、日本語とそれ以外の言語でコミュニケーションできる人材の確保がとても重要だと思います。

柴山 今回の震災を通じて、自主防災組織の見直しが行われると思いますが、そこに多文化という視点が必要で、多文化の視点を入れることによって少しずつ変わってくると思います。また、東北大学には毎年たくさんの方が留学生が来ますが、その際に日本の避難所のことなどを教えるための防災教育プログラムを整備しなくてはならないと思います。外国人旅行者についても、観光案内などに少しでも防災のことを記載する必要があると思います。そして、この研究会で話し合われたことなどを 100 年、1000 年と伝えていかなくてはならないと思います。

佐藤 ありがとうございます。今回の研究会の成果として、「多文化防災」モデル事業案を提案させていただきましたが、やはり、今回話し合われたことを実際にやってみることが必要です。来年度はぜひ SIRA としても実施したいと思いますし、今日ご参加くださっている町内会のなかでご検討いただけたところがあれば、SIRA としても協力したいと思いますので、スタッフにお声掛けいただければ幸いです。ちょうど時間となりましたのでパネルトークを終わりたいと思います。ありがとうございました。



3. 「多文化防災」モデル事業研究会

研究者、行政、地域の担い手らと協働で「多文化共生」の視点から防災事業および災害時支援の有効性を検証しつつ、「多文化防災」のモデル事業づくりを行いました。

日時・場所:

第1回: 2011年11月15日(火) 13:30~15:30 仙台国際センター交流コーナー 図書室

第2回: 2011年12月02日(金) 13:30~15:30 仙台国際センター交流コーナー 研修室

第3回: 2012年01月10日(火) 13:30~15:30 仙台国際センター交流コーナー 研修室

第4回: 2012年02月10日(金) 13:30~15:30 仙台国際センター交流コーナー 研修室

メンバー:

今野 均 (片平地区連合町内会会長)

朝間 康子 (仙台市立三条中学校教頭)

佐藤 登 (仙台イスラム文化センター代表)

馮 雷 (仙台地区中国学友会会長)

関 磊 (仙台地区中国学友会)

柴山 明寛 (東北大学大学院工学研究科附属災害制御研究センター助教)

土井 佳彦 (NPO 多文化共生マネージャー全国協議会理事)

時 光 (NPO 多文化共生マネージャー全国協議会)

高木 和彦 (NPO 多文化共生マネージャー全国協議会副代表理事)

志渡澤 祥宏 (NPO 多文化共生マネージャー全国協議会監事)

佐藤 和文 (仙台市青葉区区民部区民生活課)

高橋 政輝 (仙台市市民局市民協働推進部市民協働推進課主査)

高坂 真理子 (仙台市市民局市民協働推進部交流政策課主事)

小野 博子 (仙台市市民局市民協働推進部交流政策課)

池田 規子 (仙台国際交流協会副理事長)

佐藤 剛 (仙台国際交流協会企画事業課課長)

須藤 伸子 (仙台国際交流協会企画事業課企画係長)

コーディネーター

菊池 哲佳 (仙台国際交流協会企画事業課企画係主事)

記録

川合 朋子 (仙台国際交流協会企画事業課企画係)

* メンバーはその都度変更しており、また各メンバーの意見は組織を代表しての意見ではありません。



4. 東日本大震災における関係機関等へのヒアリング結果の概要

ヒアリング先等一覧

	日 時	訪 問 先	本報告書への掲載
外国籍市民懇談会として実施したもの			
1	2011年6月25日(土)	ブラジル出身者による懇談会	IV-2
2	2011年7月2日(土)	イスラム系コミュニティの懇談会	IV-3
3	2011年7月14日(木)	台湾出身者による懇談会	IV-1
関係機関等へのヒアリング			
1	2011年10月13日(木)	仙台市社会福祉協議会	省略
2	2011年10月14日(金)	千代田町町内会	III-1
3	2011年10月18日(火)	駐仙台大韓民国総領事館	I-1
4	2011年10月20日(木)	東北大学大学院工学研究科付属災害制御研究センター	省略
5	2011年10月22日(土)	片平地区まちづくり会	III-2
6	2011年10月26日(木)	仙台市災害対策本部	省略
7	2011年11月8日(火)	仙台日仏協会(アリアンス・フランセーズ)	I-3
8	2011年11月8日(火)	東北大学留学生課	II-1
9	2011年11月9日(水)	宮城県警察本部組織犯罪対策課	II-2
10	2011年12月26日(月)	在日本大韓民国宮城県地方本部	I-2

* 外国籍市民懇談会は、外国人の生活上の困りごとや仙台国際交流協会への要望等をお聞きするため、毎年、対象等を変えつつ開催しているもの。上記には、東日本大震災を主なテーマに開催したもののみ掲載した。

I 外国人による団体や機関の動き

I-1 駐仙台大韓民国総領事館

朴煥善(パクファンソン)副総領事、梁祐宗(ヤンウジョン)氏/2011年10月18日(火)

■ 震災直後の領事館 – 領事館が避難所になることは想定外

大震災発生初日には、高齢者の家族を中心にいくつかの家族が総領事館に避難してきたが、停電、断水、ガス供給停止などが続いた次の日からは、多くの韓国人滞在者が公館に避難してきた。多いときで1日200人以上が総領事館の多目的ホールなどで寝食をした。ほとんどが留学生と企業の駐在員家族であり、いわゆる日本で生まれた特別永住資格を持つ在日韓国人たちはほとんど地元の避難所へ避難していたものと把握している。総領事館は、仙台以外の地域の居住者のうち家屋の全壊や孤立した地域で救助を要請してきたお年寄りや子供たちと一緒にいる韓国人を公館に連れて来たりした。

特に蔵王山にいた韓国人スキー観光客が現地で被災し、車両のサポートを要請してきたこともあった。

当初総領事館が臨時避難所になるのは、地震対応マニュアル上に想定されていなかったが、適切かつ臨機応変、積極的な対応を通じて当該避難所の役割を滞りなく行った。

最初は総領事館スタッフでさえ食べ物や布団などがなかったので総領事公邸で使用する布団と保管中だった食品を急いで確保する一方、避難者たちが毛布などを直接確保するようにした。

地震発生の翌日深夜に韓国外交通商部迅速対応チームが総領事館で緊急要請した食品(カップ麺等)、生活必需品、医薬品、特に赤ちゃんのミルクなどを新潟空港経由で輸送し、以後、駐日韓国大使館、韓国企業などや、東京、山形県など周辺地域民団から救援物資を送ってもらった。このような迅速な対応により、当初心配していた非常食などの不足の問題が解決した。

総領事館は、このような救援物資の一部を青葉区内の小学校などの避難所にも送付し、日本人はもちろん、他の国籍の外国人にも、希望した場合は、水や食品、食事を提供した。

停電時には総領事館内の自家発電機を稼働してカバーしていたが、比較的早く停電も回復した。水道水の

供給も問題なかった。電気の問題が解決したことで、多くの避難者が総領事館内から韓国の家族に国際電話で無事かどうかを知らせることができ、暖房も使用できたので臨時避難所運営に大きな助けとなった。

地震発生直後には、公館職員が少人数であったため困難も多かったが、韓国教育院長と仙台で研修中の数名の韓国の公務員などが参加し、特に韓国の迅速対応チームが地震発生後一日半で新潟を經由して仙台に到着すると、不足している人材の問題を解決できた。

総領事館側は、避難者のうち、韓国に一時帰国を希望する留学生などに対しては、新潟や秋田の空港経由で帰国させたが、その中には少数の中国人留学生など外国人も含まれていた。最初は駐新潟韓国総領事館と駐日韓国大使館が手配したバスとワゴン車で移送し、後に観光バスを借りるなど、すべての利用可能な手段を講じた。

総領事館内に設置した臨時避難所は、配偶者が津波によって死亡した妊婦(日本に帰化)の家族等を保護するために4月27日まで運営された。

■ 震災で領事館が果たした役割

- ① 地震の被害状況把握など情報収集と対応策を準備
- ② 韓国人の被害状況の把握と韓国内の親戚等からの安否確認要請への対応(1,043件受信、1,039件を確認し、未解決の4件は、情報不足により確認困難)
- ③ 臨時避難所運営
- ④ 韓国国民に対する一時帰国支援
- ⑤ 仙台とそれ以外の地域の被災地韓国人支援と救援活動
 - 総領事館内避難を希望したり、救助を要請する場合は、現場に出動し救助、救援物資提供
- ⑥ 救援物資の受付及びサポート
- ⑦ 韓国のマスコミ取材活動支援など

■ 安否確認について

地震発生直後には緊急連絡網を利用し、民団や各自治体、県警などを通じて、東北6県の主要都市の被害状況を把握しながら韓国人被害を確認した。

総領事館は、保有している連絡先と韓国の親戚等が知らせてくる連絡先などを活用して安否状況を確認しており、民団は団員のリストを活用して安否を確認した。

また、東北大学に留学中の学生に対しては、韓国教育院長と東北大学韓国人留学生会で安否確認をした。

総領事館は、日本政府から提供された東北の被災地の韓国人リストと、通常保有している在外国民登録資料を利用して管内韓国人の安否や被害状況を把握した。

特に総領事館は、国内から1,043件の安否確認連絡を受けて、職員が数日夜通し苦勞して連絡先など不備があった4件を除いた1,039件の安否を確認し、確認率は、電気復旧率と比例する様相を見せたりもした。これは、通信が回復しても停電状態が続く場合は、電話、携帯電話の電池が無くなり、連絡を取るのが難しかったということで、今後各自非常時に携帯電話の充電が可能な自家発電ランタンなどを用意しておかなければならないと思う。

普段の災害発生に備えた連絡網の拡充も課題で、現在の韓国総領事館は、災害対策の複合マニュアルと緊急連絡網の補完はもちろん、非常持ち出し品を準備し、いつ再発するかもわからない自然災害への備えに万全を期したい。

総領事館は、日本の各自治体や警察当局から韓国人の死亡者に対する迅速な通知と協力を謝意を表していた。

I-2 在日本大韓国民団宮城県地方本部

姜恵美子事務局長、田炳樽議長／2011年12月26日(月)

■ 民団について

民団宮城県地方本部(以下、民団)は宮城県に住む在日韓国人の法的地位と民生安定、生活向上、国際親善を目的とした生活者団体である。登録している団員数は約600世帯2,500名だが、そのうちの約2/3は仙台在住である。

■ 震災直後のこと

3月11日は、民団事務所のあるビルの8階で婦人会主催の講演会があり約100名が集まっていた。他に韓国語講座の受講生もいた。揺れが少しおさまってから全員帰宅したが、自宅に戻れずに婦人会会長の家に泊めてもらった人もいた。来館者の避難誘導が終わり職員は全員帰宅した。

職員は、3月12日から再出勤し、情報収集や安否確認を開始した。また、その日には、友人や知人の安否情報を求め、団員が民団に集まってきた。民団中央本部(東京)より救援隊が入り「東日本大震災被災者支援民団宮城対策本部」を設置。民団事務所の運営を手伝ってくれた。団員は、日頃、地域に溶け込んで生活しているので、避難が必要な人は地域の避難所に避難したと思われる。

■ 被災者に対する安否の確認や物資の支援

仙南、仙北、塩釜には民団の支部があるが、交通機関のマヒ・ガソリン不足の為に当面本部からの安否確認が続いた。支部も徐々に支援活動を行ったが、被害の大きかった気仙沼、石巻、女川での安否確認や物資の支援は、民団本部が担当した。

毎月新聞を発送しており名簿情報は比較的新しかったが、団員全員の安否の確認が終わるまで2~3か月を要した。震災後に会員が約40世帯増加。緊急時に備えてつながりを求め、新たに団員になったのだと思う。

日本中の民団から物資提供があり、民団に集まった物資は、会員のいる沿岸部の避難所などをまわって提供した。また、沿岸部をまわって炊き出しなどの支援活動を行った。約6,000食を提供した。

河北(石巻)の仮設住宅からは、皆が元気になれるようなイベントをしてほしいという依頼があり、炊出しの予定。

I-3 仙台日仏協会・アリアンス・フランセーズ(アリアンス・フランセーズ仙台)

院長 ダミアン・ロジェ＝ココー氏／2011年11月8日(火)

■ 市内のフランス人の数

大使館に登録している人は、県内に44人(フランス人と結婚した日本人やその子も含む)だったが、登録していない人も多く、実際には90人以上いることが分かった。そのほとんどは仙台市内に住んでいる。東北大学の留学生・研究生が多いが、フランス語の教員や企業で勤務する者もわずかだがいる。アリアンス・フランセーズ仙台は東北6県をカバーするが、宮城県以外に住むフランス人の数は、非常に少ない。

■ フランス人の安否確認及び支援

3月11日の午後3時頃、東京のフランス大使館に電話するが、大使館も混乱しているようでつながらず、あとでまた電話することにした。その日の午後7時頃、フランス大使館から、ダミアン氏の 아이폰 のメールへ登録者のリスト(名前のみ)が届いたので、震災当日の夜から、フランス人の安否確認を始めた。

安否の確認には、フェイスブック、メール等がかなり役立ったが、歩いて訪ねることも多かった。夜に何時間も歩いて探した。昼間は、水や食べ物を探して歩いた。安否の確認に併せ、フランス人への情報提供、相談、必要な人に水や食料を届けるなどの仕事を行った。放射線の危険性について聞かれる場合があり、「分からない」と答えると、「なぜ、分からないのか」と怒りだす人もいた。

■ フランス大使館からの物資の支援

3月26日、フランス大使が来仙。このとき、フランス大使館から初めて物資(水、食料等)が届いた。

この時点で、仙台市内にはフランス人とその家族が 25 人しか残っていなかった。うち、10 人～15 人が仙台からの脱出を希望していたため、大使館に仙台から山形へ向かうバスを用意してもらうことにしたが、実際にバスの手配ができた 4 月頭の時点では、仙台脱出を希望するものがいなかった。

注*フランスから日本への支援としては、超大型輸送機アントノフ An-225(非量産機としては世界最大)に大規模な支援物資と原発事故対策に有益な物資・機材・人員を乗せ、空輸した。総重量 150 トンにおよぶ支援物資は、先に派遣されていたフランス市民安全部隊の 2 隊が分配を行い、ユーロコプター提供のヘリコプター 2 機で分配作業を支援。また、放射線防護機器および放射線測定器約 30 トン、大気測定用トレーラー 1 台、環境放射能測定用トラック 3 台も福島原発事故の関係当局に提供した他、多方面から継続的な支援を続けている。4 月 10 日には、さらに放射線防護機材 40 トンを支援。個人放射計、個人線量計、マスク、フィルター、放射線防護服などが含まれ、日本に駐在する専門家スタッフも増強した。2012 年 3 月現在、仏大使館を中心に、文化プロジェクトを通じての長期的支援キャンペーン『日本とフランスー共に明日に向かって』を展開中である。

■ 仙台に住むフランス人は、ある程度日本語ができる

来仙間もないフランス人の中には日本語があまりわからない人もいるが、全体としては、比較的日本語ができる人が多い。特に、留学生が多い東北大学では、9 月に来仙した留学生を対象に、半年間の日本語集中講座を用意しているため、日本語の基礎がある程度できていると言える。

■ 情報はどこにあつまったか

フランス人が集まる、“たまり場”のようなものはない。しいて言えば、東北在住フランス人に関するすべての情報は、携帯電話等を通じてダミアン氏に集まった。

* 仏大使館では、震災以前から、ダミアン氏を含め仙台に住む 4 人を緊急時の連絡員とし、うち 2 人には衛星携帯電話が貸与されていた。

II 外国人被災者に対する関係機関の対応

II-1 東北大学留学生課

渡辺 幹博 留学生支援係長 / 2011 年 11 月 8 日(火)

■ 留学生の安否・動向確認

東北大学には震災当時約 1,500 名の留学生が在籍していたが、震災後数日間に 8、9 割の学生が仙台を離れた。大使館から人が来て留学生の帰国を促している国もあった。

3 月 16 日からウェブサイト(東北大学ウェブサイトのトップページにリンク)を使って留学生の安否及び動向確認をした結果、4 月 18 日までに 926 名から回答があった。その結果は下記の通り。

「国内にいる」 136 名(仙台市内 77 名、市外 59 名)で全体の 14.7%

「国外にいる」 790 名で全体の 85.3%

3 月 28 日には留学生全員の安否確認を終了(1,499 名)。死傷者はゼロだった。

留学生への連絡は、大学院生の場合は指導教官から、学部生の場合は部局の事務担当からメールや電話などで行った。

震災を機に退学や休学した留学生はほとんどいないと思う。95%くらいの留学生は帰ってきている。

留学生の親などから安否確認の問い合わせは、留学生課への直接連絡はなかった。もしかすると担当部局のほうにはあったかもしれないが把握していない。

一時帰国してしまった留学生の大家から家賃未納や荷物引き取りなどの連絡があり、本人に連絡をとったりした。家賃が未払いのまま引き払ってしまうケースについては大学が保証人になっているので保険が適用され、処理した。戻ってこられない留学生については、指導教官が部屋の片づけなどに出向いていた。

震災後、三条町の国際交流会館グランドに仮設宿舎を建設した。300 室あり、内 150 室が留学生で、残りは日本人学生に割り当てられている。

II-2 宮城県警察組織犯罪対策課(通訳センター) / 2011年11月9日(水)

■ 行方不明者相談ダイヤル

宮城県警察本部では、外国人を含め全県民からの行方不明者に関する相談を受け付けるため、発生翌日に「行方不明者相談ダイヤル」を設置した。外国語による相談については、同課内にある通訳センタースタッフが英語、中国語、韓国語、スペイン語で対応した。

■ 外国人避難者に対する情報提供

避難所を巡回して、外国人の避難状況を把握し、英語・北京語・韓国語に翻訳した地域安全ニュースを配付して、貴重品の自己管理の徹底や義援金便乗詐欺に注意するよう呼びかけるなどの防犯対策を実施した。

■ 安否確認依頼等への対応

安否確認に関する届出については、日本人・外国人に関わらず、氏名・住所・連絡先を聴取の上、全件受理した。

この他、各国の日本大使館が受理した安否確認依頼については、外務省が取りまとめた資料が被災各県警察に送付されたことから、その照合作業を行った。

これら安否確認の依頼に対し、死亡又は生存が確認された場合は相談者に連絡、行方が判明せず確認ができない場合については職員が一件一件電話をかけるなどの確認作業を行った。また、相談者に対しては、安否確認ができ次第その旨を「行方不明者相談ダイヤル」に連絡するよう依頼した。

III 町内会の動き

III-1 千代田町内会 会長 / 2011年10月14日(金)

■ 避難所の開設と運営

三条中学校では、体育館と武道館で別々に運営した。これは取り決めたものではなく、自然にそのような成り行きになったと理解している。発災直後は、町内会の要援護者の安否確認に回り、夕方に三条中学校の避難所に向かった。

日頃の防災訓練における避難所参集訓練では、安否確認のために指定避難所に参集する前に、必ず東北福祉大学前に参集するようにしていた。今回はそれが役立ったと思う。

要援護者の安否確認については、災害時に使用するという条件でリストを作成していたのが役立った。リストに掲載されていた方以外に、町内の一人暮らし高齢者 15 人、高齢者世帯約 20 世帯についても民生委員、福祉委員、町内会役員が安否の確認をし、その日の夜のうちに全員と連絡がとれた。

避難所の運営は教員が中心となって始まった。ピーク時には、武道館に 250 人、体育館に 500 人くらいの避難者がいたのではないかと。また、避難者は、8 割くらいが外国人住民だったように思う。

ライフラインが途絶していたものの自宅が寝泊まりできる状態だったので、日本人はあまり、避難所には来なかったようだ。

外国人の避難者は東仙台や幸町方面からも来ていたようだ。それは外国人同士が携帯電話等で連絡を取り合い、三条中学に集まったようだ。

発災当日夜の炊き出しは 20 時ころに開始して、23 時 30 分頃に終了した。アルファ米の炊き出しに時間を要した。アルファ米に水を入れて試みたが時間がかかり、途中で学校の家庭科調理用の鍋でストーブに乗せて炊き出しをした。鍋が小さいこととストーブの火力が弱いということから長時間を要し、全員に配り終えたのは 23 時 30 分頃だった。

発災当日、避難所に集まった市民に一度毛布や懐中電灯、ストーブを取りに帰宅するように伝えたことは避難所運営の点で良かったと思う。

トイレの衛生状況が悪かった。特に、体育館はひどい状況だった。今になって考えると、プールの水を利用すべきだったが、当時は頭が回らなかった。

仮設トイレは、はやばやと中学校教員の指示で中学生が組み立てていたようだった。

町内の人は何とか自宅に住める等の理由で避難所へは行かず自宅に留まった人が大部分だったので、町内会では、2人1組で、1日3回、高齢者の方のお宅を中心に巡回した。

3月12日の朝には、町内の在宅避難者のために町内会集會場で町内会役員が炊き出しを行った。アパートに住む若い人も集まった。炊き出しのために、町内の方、特に高齢の方が自宅の米、みそ、野菜等を持ち寄ってくれたことは有難かった。若者は備蓄が少なく、高齢の方がよく備蓄していると思った。

■ 外国人避難者についての課題

①避難所に持ち込んだ寝具や食器、自転車等を置きっ放しで避難所を後にしたこと、②言葉が通じない、という2点があげられる。

①については、約一か月後に中学校の物置に移動したものの、その後も引き取り手が現れなかったため、地区防災責任者から仙台市環境局に連絡し、一か月半過ぎたところ処分していただいた。

②については、避難所での炊き出しや注意事項を周知することが難しかった。しかし、学生ボランティアが通訳を申し出てくれたことや、拡声器や大声で避難者に呼びかけることで日本語でもどうにか伝わることも実感した。

学校では教室の一つを学生ボランティアに提供した。なお、学生ボランティアは何かのサークル等のメンバーというわけではなく、地震発生後自主的に集まったメンバーのようだった。学生ボランティアが自主的に活動をしてくれた。とくに、東北大のある学生は通訳や他の避難者のケアを積極的に行ってくれて、助かった。

体育館に日避難していた30代とみられる夫婦から、外国人避難者が食べものを散らかしているという苦情があった。確かに、食べ残しのある食器などを避難所の床に置きっ放しにしている様子などが見られた。また、外国人避難者が避難所内のストーブのまわりを占拠している様子なども見られた。

■ 避難所の閉鎖

東北大学国際交流会館では10人部屋を8部屋、開放してくれた。外国人住民にはそちらへ移るように話した。高齢者や身体障がい者は北山市民センターに移るように話した。北山市民センターは暖房設備などもあり、高齢者身体障がい者には良かったと思う。避難所を出ることを拒む外国人がいたが、東北大学の教員が英語で説得した。

■ 外国人住民との交流

外国人住民との日頃からの付き合いが大切だと実感している。町内会の祭りなどで積極的に交流しようと努めているが、その場限りで終わってしまうことが多い。外国人住民がゴミ捨てるルールを守らないことにより、トラブルが発生している。そのようなことが影響して外国人住民に対して「付き合いにくい」とか「分からない」といった近づき難いイメージがあるように思う。東北大学の国際祭りには足を運んでいる。東北大学の国際交流会館の住人は毎年入れ替わることもあり、国際祭りに参加しても一過性のものにとどまり、継続した付き合いにはなかなか進まないが根気よく交流に努めている。

Ⅲ-2 片平地区まちづくり会 片平市民センター／2011年10月23日(金)

片平地区まちづくり会は、青葉区役所の働きかけを受け、東日本大震災以前の2010年度に片平地区にある町内会の役員等により結成。震災後、NPO「都市デザインワークス」が行った各町内会への聴き取りなどをもち、**「片平地区 東日本大震災における避難状況等の調査報告書」**を作成した。

■ 町内会が行う安否確認

上記の調査報告書で、「町内会は、住民と協力して、安否確認と在宅避難者の支援を行う」としているが、事前に本人から申し出があった人以外の要支援者の把握が難しい。民生委員は、一人暮らし高齢者等の情報を持っているが、個人情報保護の関係で情報共有が困難である。要支援者の支援について個人情報の取り扱いを検討する小委員会(連合町内会、社会福祉協議会、民生委員児童委員協議会)を作るべきだと考えている。

■ 町内会と避難所運営

町内会は、避難所運営以外にもやることがあるので、本来、1～2日経ったら行政や避難している方々の自主運営組織にバトンタッチすべきだろう。もちろん、バックアップはする。

マンション対策も大きな課題だ。マンション対策は地域ごとに任せられているところがあったが、連合町内会として対策が必要ではないか。なお、最近できたマンションは免震構造のものなど耐震性が高いので必ずしも、指定避難所への避難は必要ではない。居住者の特性や耐震性を考慮し、マンションの集会所で情報提供や物資の配布を行うなど、各マンションが個別に震災対策を考えるべきなのかも知れない。

片平丁小学校に外国人留学生在が殺到したが、言葉の問題などもあり対応に苦労した。避難所開設当初は対応せざるを得ないが、3～5日くらいしたら仙台市がどこかに束ねてもらおうなどの対応をしてほしい。

帰宅困難者も大きな課題である。JRは発災後にすぐに閉鎖したこともあり、東二番町小学校、片平丁小学校、立町小学校などに帰宅困難者が溢れた。片平丁小学校の約1,600人のうち、7～8割は地域の人ではなく帰宅困難者だったのではないだろうか。受け入れを拒むことはないにせよ、仙台市として帰宅困難者対策が必要だ。御霊屋、瑞鳳殿にかなりの観光客がいた。観光客は指定避難所の場所もわからない。地域に任せるのではなく、行政で対応を考えてほしい。

■ 外国人避難者への対応について

仙台国際交流協会の災害時言語ボランティアが避難所に来たことも分からなかった。国際センターが災害時支援の取り組みをしているということは外国人に知られていないのではないかな。

外国人の連絡網はすごい。他から外国人が来て、場所取りするようなことも見られた。

避難所にいた中国人たちから新潟へ行くための経路を聞かれることが多かった。また、マレーシア人は大使館の手配によって仙台を離れた。「外国人を地域防災の担い手に」という話があったが、高齢者が配食などの避難所の運営をして、若い外国人留学生在が食事のためだけに避難所に来るようでは困る。

IV 外国籍市民の行動～外国籍市民懇談会から

IV-1 台湾出身者による懇談会 仙台国際センター／2011年7月14日(木)

Aさん(在仙14年、子どもは3人、ご主人も台湾人)

Bさん(日本は9年目。子どもは2人。ご主人は日本人)

Cさん(約50年前に来日。子ども3人、ご主人は日本人。現在はご主人と二人暮らし)

Dさん(約25年前に来日。子どもが2人。夫も台湾人)

Eさん(10年余り前に留学で仙台に来て、そのまま就職。市内の学校に勤務。独身)

■ 3月11日の地震の時、どこにいましたか？

Aさん: MIA(宮城県国際交流協会)で行った研修会に参加していた。ビルの7Fだったので揺れてすごく怖かった。

Bさん: 子ども達と市内のマンション4Fの自宅にいた。30Fの友人宅に遊びに行くところで、出かける寸前だったが、家を出る前で本当に良かった。

Eさん: 学校で勤務中だった。研究室にいたが、同僚がパニックになって泣き出したのでなだめた。学生を広場に避難させ、安否確認。余震も続き、携帯も使えなかったため、不安になっている学生が多かった。学生とワンセグを見ながら、情報収集した。

Dさん: 三越近くの税務署にいた。税務署は混んでいて、やっと自分の番になり、ブースに座った途端に地震が起きた。停電になったため、外に避難誘導された。一番町のアーケードは、商店街から避難してきた人で、すごい人だった。車で避難した。情報がなくて不安だった。車でラジオを聞くことすら思いつかなかった。帰宅途中、コンビニで食料と水を調達。信号は動いていないし、周りが暗くなってきて、車は全然動かなくなった。尋常じゃない事態に気付き、もう一度、コンビニで食料を買った。この時は、お店がすごく混んでいた。中学生の娘と連絡がとれなくて心配だった。自宅は危険だったので、娘あてに家に張り紙をして、主人の職場に泊った。次の日、学校まで娘を探しに行くと、無事に他の生徒と学校に泊っていた。

Cさん: 地震発生時は、主人と妊婦の娘と一緒に自宅にいた。自宅前が松林で、近所の人はみなそこへ避難しに集まってきていた。松林の隣にある老人ホームのおばあちゃんたちも車イスで避難してきた。雪が降ってきて寒かつ

たので、上着やブランケットを取ってきて、みんなで使った。近所で一人暮らししている84歳のおばあちゃんの様子を見に行き、避難させた。3月に町内会で防災訓練をしたばかりだったので、みんなを集会所に避難誘導した。集会所も地震直後は混乱していて、近くの小学校に回された。避難訓練で決められた役割は、自分は給水、炊き出し係だったが、みんなを避難させることに精一杯で、そんなことは全然覚えていなかった。その後は自宅に戻り、娘と主人と一緒に近所のおうちにお世話になった。翌日、開かなくなったドアを壊してもらい、煮炊きができる昔のストーブを取り出して、近所の人と食べ物を分け合った。娘の同級生や近所の人に助けてもらい、地域の大切さ、ありがたみを感じた。その後、3月15日に主人の親戚が迎えにきてくれて、新潟に避難した。

■ 避難所に行きましたか？

Aさん： 若林区の避難所にお手伝いに行った。地震の前日に、車のガソリンを満タンにしていたのでラッキーだった。MIAには車で行っていたので、帰りに車が使えて良かった。小学校には主人が子どもを迎えに行ってくれた。学校の前で、家族に会ったので、そのまま車で買い出しに行った。自宅はほとんど被害がなかった。すぐに、台湾の家族から電話がきて、特に母は心配して泣いていた。その後、台湾からは毎日電話がきて、台湾の報道の様子を聞くことができた。

Eさん： 電話が通じないのが、一番不安だった。学校の電話は幸い使えたのでよかった。台湾の兄とすぐに電話がつながって話ができよかった。姉がGoogle Finderで私の情報を載せてくれたので、台湾や、外国に住む友人たちはそれを見ることができた。母はインターネットが使えないので、心配して電話に出るたび泣いていた。近くの避難所になった小学校にも行った。勤務先から、ラジオを抱えながら歩いて自宅へ帰った。もともと3月に引っ越しをする予定だったので、荷物をまとめてあってラッキーだった。壁には深い亀裂が入って、余震も続き、アパートが安全か不安だったので避難所に行くことにした。避難所で避難者リストに名前を書いたら、中国語が話せるボランティアが話しかけてきた。毛布とかは既に足りなくなっていて、床に敷くシートを受け取り、好きなところに座るように言われた。知り合いもいないし、体育館はすごく寒かった。体育館には400人近くが集まっており、かなりぎゅうぎゅうだった。外国人の家族もいた。夜中に、自家発電のライトが届いた時は、拍手喝采だった。避難所には、赤ちゃん、車いすの方、ペットなどもいた。朝食の用意を手伝ってから、明るくなったのもう一度自宅の様子を見に行った。アパートの上に貯水タンクがあったので、断水はしなかった。

■ 日頃の防災意識

Aさん： 町内会や小学校では毎回あるので参加している。

Bさん： 台湾は2000年の中部大地震以来、防災意識が少し出てきたようだ。4年前、石巻に住んでいたとき、震度4の地震があったので、その時に防災用品をすべてそろえた。非常用持ち出し袋も用意していた。地震が起きた時は、防災頭巾を子どもにかぶせてテーブルの下に入った。近くの小学校が避難所になっていたが、アパートは新しく被害がなかったのですぐに自宅に戻った。

Cさん： 近所にすごく頼れる若者がいて、なんでも面倒を見てくれた。

Dさん： 結婚式の時に使ったロウソクがすごく役に立った。捨てなくてよかった。

Bさん： あの地震の日以来、こまめにガソリンを入れるようになった。

Eさん： 地震の数日前から、何度も地震の夢を見ていた。3月11日の1週間くらい前に学校の防災マニュアルができてみんなに配られたばかりだった。そのマニュアルに沿って動けたので助かった。

■ ふだんは、どうやってお互いに連絡をとりあっていますか？

Dさん： 年に3~4回、華僑会の集まりがある。それ以外にも、個人的に少人数で集まってお茶を飲みながら情報交換している。

Cさん： 若い人たちや婦人会は携帯メールで連絡をやりとりしているようだ。

Bさん： 台湾とは、スカイプで連絡をしている。

Aさん： 台湾コミュニティは、特に連絡方法が決まっているわけではないので、あきらめずに電話し続けるしかない。

Aさん： 国ごとに連絡係となる人が何人かいるといい。

Cさん： 災害の時は、遠くの親戚よりも、近くの人と協力するほうが現実的。日本人は気をつかい過ぎるところもあるが、台湾だったら助け合うのはお互い様だから、気にしない。

■ 震災を経て、日本で感じること

Eさん： 台湾は、メディアが自由に情報を流すので情報量がすごい。ただ、どれを信じるか自分で見極めないといけない。日本は、どの番組を見ても同じことしか言わない、なかなか情報が更新されない。海外メディアは過激な報

道もあり、日本全体が既に汚染されているようなイメージがついてしまうような報道をしている。日本のメディアは統一されている代わりに、海外に比べて情報量が圧倒的に少ない。

Eさん: 日本人はこんな事態になっても怒らないから不思議。日本の情報は限られているから、外国メディアから情報を得ている。日本にいるのに、日本の情報が入ってこないのは悲しい。

Aさん: 日本人のやり方は大人だと思う。起こってしまったことに怒ってもしょうがない。それよりも解決策を考えようという姿勢がある。

Eさん: でも、やってみもしないで、あきらめるのはどうなのか？学習された無力感という感じがする。

Cさん: 日本人はお互い遠慮する民族。それが日本の良いところでもあるが、町内会でも気を使いすぎて、言いたいことがいえない状況があるのは良くないと思う。一人だけ、足並みをそろえないのもよしとされない。震災時に限らず、普段から近所との付き合いは多いのでお互い良い関係を築いていかないとけない。

Eさん: 台湾に仏教のボランティアグループで「慈濟(ツチイ)」という大きな団体がある。今回の震災でも、日本に支援にきた。台湾人は、宗教をおいておいても、「人を助ける」という考え方が浸透していると思う。お世話好きだと思う。

IV-2 ブラジル出身者による懇談会 仙台国際センター／2011年6月25日(土)

Aさん(女性 30代)

Bさん(女性。東北大学院留学生)

Cさん(女性。東北大学院留学生。Bさんの姉)

■ 3月11日震災発生時のこと、その後の行動

Aさん: MIA(宮城県国際交流協会)の建物で会議に参加していた。外国人30人くらいいた。会議が始まって5分後位に地震発生し、テーブルの下に避難した。なかなか揺れが収まらなかったので死ぬと思った。カトリック信者なので聖書の言葉を言い続けた。「いっぱい悪いことをしていますが地獄に飲み込まれるのはいやだ」という趣旨のお祈りをした。10分後、揺れが収まり、中国人の方が「大丈夫だよ」言ってくれて、その人と二人でずっと避難。一緒に死ぬのだから、一緒にいましょうといった感じで同行した。でもその方には名前も聞かずじまいになってしまった。沖縄の友人からの電話を最後に電話は使えなくなる。雪も降ってくる。避難バッグを取って、小学校に避難した。

電気が復旧して、マンションに戻ってからが地獄だった。いろんな情報、膨大な安否確認が殺到したためである。外国では、ニュースは嘘も誠も混在といった様子だった。「日本は沈没だ。はやく脱出せよ。爆発したよ」といった連絡が相次ぐ。ヒステリーにもなった。パスポート切れもあり混乱。友人の一人に電話で日本から脱出したいという趣旨のことをいったら、「沈むわけがないんだから！大丈夫だから。」と請け合ってくれて、また、いろいろ親身になってお話ししてくれた。心の平静を取り戻した。

Cさん: 私たちの場合は日本とブラジルの二つがある。だから、日本がダメなら、次はブラジル、セカンドがあると思うが、日本人はそうはできないし、厳しいなあと思う。

Aさん: 帰るところの選択肢があることは幸せであることに気づく。と同時に、日本人には日本しかない。ここで自分だけ帰ってしまったら、ひどいことである。ポルトガル語を教えている生徒達は、日頃、ご飯を分けてくれたりする。過去15年間に関わった日本人の顔が次々と頭をよぎる。そう気づいてからは、「死ぬんだったらもうそれでいい」と開き直ることができた。

Bさん: ブラジルでは地震がないから、近くのおじいちゃんが「この地震はすごい」と言うのを聞いても実感がわかなかった。研究室に戻って、本棚から崩れる様子、コーヒークップが散乱している様子を見て、「戦争か。夢か。本当じゃない。」と感じた。いつもはハイヒールを履いて、パソコンを使っているという日常だったが、あまりの変わりようである。パソコンだけは持って、大学内の体育館に避難した。友人たちといつもは話さないような、プライベートな話もできてよかった。しばらくして姉がヘルメットをかぶったまま現れた。真っ暗のなか、Bどこ？という姉の言葉で再会できた。2日後に電気が復旧したので、自分たちの部屋に戻った。月曜日に研究室に戻り、教員の人たちは石巻に行って支援するという。自分も行きたかったが、「あなたは邪魔になる。ここに残っておにぎりを作りなさい」命じられる。給水所などに行った。だけど、もっと他のこともしたかった。だって戦争なんだから。福島原発で2回目の爆発。戦争なのだ。逃げるわけにはいかない。逃げたら、戦争に負けて逃げるのと同じ。仙台に残ってどうするのか、と自問する。いても、研究するわけにもいかない。ひとまず、自分、姉、もう一人の日本人の3人で山形に行くことにした。夜の8時くらいに着いたが、もう最終バスは出ていた。寒さがこたえる。それで、ちゃんちゃんこを着ていた。外で、翌日のバスを待たねばならない。一緒にいた日本人の友人のお父さんの友人の方の申し出で1泊過ごすことができた。翌日、バスに乗ることができ、山形から新潟に移動し、そこから東京に行き、さらに浜松の知人の元に行った。4月3日に帰仙した。部屋の設備はプロパンガスだったが、「都市ガスなら使うと爆発するからダメだ」というアドバイスを混同

して、しばらくガス使わなかった。いつもは、学食でご飯を食べるため食料の備蓄はなかったもので、東京から戻るときに、米5キロなど多くのものを持っていった。

Cさん: 青葉山の実験室にいた。揺れが来て、机の下に潜った。地震発生と同時にほとんどの人は外に飛び出していた。「どちらが、避難の方法として、正しいのか」。青葉山から、友人の車で星陵キャンパスのほうへ向かった。大崎八幡宮まで2時間ほどかかった。夕方5時過ぎくらいでもう真っ暗。八幡コープもSEIYUもデイリーヤマザキも閉まっていた。近くのセブンイレブンとローソンは開いているという。ヘルメットをかぶったまま、目的地へダッシュした。6時過ぎくらいに、到着した。日本人はみんな並んでいた。買い物終わった人も、他の人が買うのを手伝って、ライトで照らしてくれた。食糧が1番大変。2番目は原発の影響で外に出られないという情報。出られないから、家にいるとご飯食べたい。という悪循環。ブラジル人コミュニティは仙台にない。教会もない。というのも、留学生の人と永住の人々では生活が合わないから。情報が信じられない。情報が増えてくると、取捨選択が困難。ブラジル政府からもいろいろな連絡があった。だが、日本の政府でさえ分からないのだから、ブラジル政府ならもっと不確か。リストがあれば万一の際、連絡を取るのに役立つはず。ただし、コミュニティに加わりたくない人も中にはいる。ボランティア活動などをすぐにしたかったが、名簿に登録しておいて、落ち着いてから始めましょうといった状況だった。

Aさん: ブラジル人は細かい文章を読んだりするのを面倒くさがる。口伝えでいく傾向あり。ゆっくり優しい日本語なら、理解できる。「これから、やさしいにほんごでながします」を聞くと安心。

IV-3 イスラム系コミュニティによる懇談会 仙台国際センター／2011年7月2日(土)

エジプト4名、エチオピア1名、スーダン1名の計6人。

ただし、うち、2名は、3月11日に日本にいなかった。

他にモロッコ出身の通訳者1名が参加。

■ 知りたいこと

ビルの中にいる場合、どのタイミングで外にできればよいのか？

避難するとき、普通の階段か、非常階段を使うべきか。

SMS(ショートメール)でメールを送ってほしい。

放射線についての情報がほしい。CNNとBBCの報道が違う。いったいどれの情報が正しいのかわからない。

適切なタイミングの適切な情報があれば、変な行動はしない。

震災時のメディカルケアはどうなっていたか。

震災後、食品を手に入れることが困難だった。どうすればよいか。

■ 地震の前と後で変わったことは

同じ。

地震に敏感になる。

NHKで大きな地震がくると言っていた、本当か？

■ 地震のあとで一番心配なのは？

放射線。放射線についての講義があったら参加したい。

資料編



「せんだい地球フェスタ」に来場した市民へ地震体験車「ぐらら」への乗車を呼び掛ける仙台市災害時言語ボランティア(2007)

1. 財団法人仙台国際交流協会(略称:SIRA)について

SIRA は、仙台市において、歴史、文化その他の地域的特性を生かした国際交流活動を推進することにより、地域の国際化に寄与するとともに、市民レベルの国際相互理解の増進と国際友好親善の促進を図ることを目的とし、1990年に設立されました。以来、言葉や国籍、文化等の違いに関わらず誰もが個性を発揮しながら生き生きと暮らせるまちづくりの推進など、市民と協働した様々な事業に取り組んでいます。

また、SIRA は、仙台市の指定管理者として、国際会議機能を備えたコンベンションセンターであるとともに市民の国際交流拠点としての側面を併せ持つ仙台国際センター(1991年開館)の管理運営を行っています。

2. SIRA の防災事業

1995年の阪神・淡路大震災における教訓や2000年に政府の地震調査委員会が宮城県沖地震の再来の高い可能性を公表したこと等により、外国籍市民や外国人観光客等に対する防災支援が緊急かつ重要な課題となっていました。SIRA がこれまで行ってきた防災事業は、大きく次の3事業に分類されます。

(1) 仙台市災害時言語ボランティア

2000年から、仙台市の指定管理事業として、災害時に通訳翻訳等を行い外国籍市民に必要な情報を提供する市民ボランティアの登録や研修を行っています。2012年3月現在、約80名の登録者がおり、その半数近くは日本語が堪能な外国籍市民で構成されています。

(2) 多言語による防災啓発

- ① FM ラジオ番組における防災情報の提供
- ② 「多言語防災マニュアル DVD」の作成、配布
- ③ 防災リーフレット「もしも地震が起こったら」の作成、配布
- ④ 新たに仙台に住むこととなった外国籍市民を対象に開催する「生活オリエンテーション」における防災情報の提供



多言語防災マニュアル DVD

(3) 地域防災訓練、災害多言語支援センター設置訓練

2004年から、外国籍市民が多く住む地区の町内会の防災訓練に外国籍市民や仙台市災害時言語ボランティアとともに参加してきました。併せて、外国人観光客も想定した商店街や旅館組合主催による防災訓練や仙台市の総合防災訓練にも参加してきました。

2010年には、大規模災害時に仙台市が開設する「災害多言語支援センター」が仙台国際センター内に置かれることとなり、同年12月に仙台市とともにその設置訓練を行いました。その後、間もなく、今回の大震災が発生しました。

3. 仙台市災害多言語支援センター活動報告

(財)仙台国際交流協会では、2011年3月11日の東日本大震災発生以降、仙台市が仙台国際センター内に設置した仙台市災害多言語支援センターを運営し、市民ボランティアや関係機関からの協力を得て外国人被災者のための多言語情報提供や相談対応などを行いました。

I. 仙台市と外国人の概要

・人口：

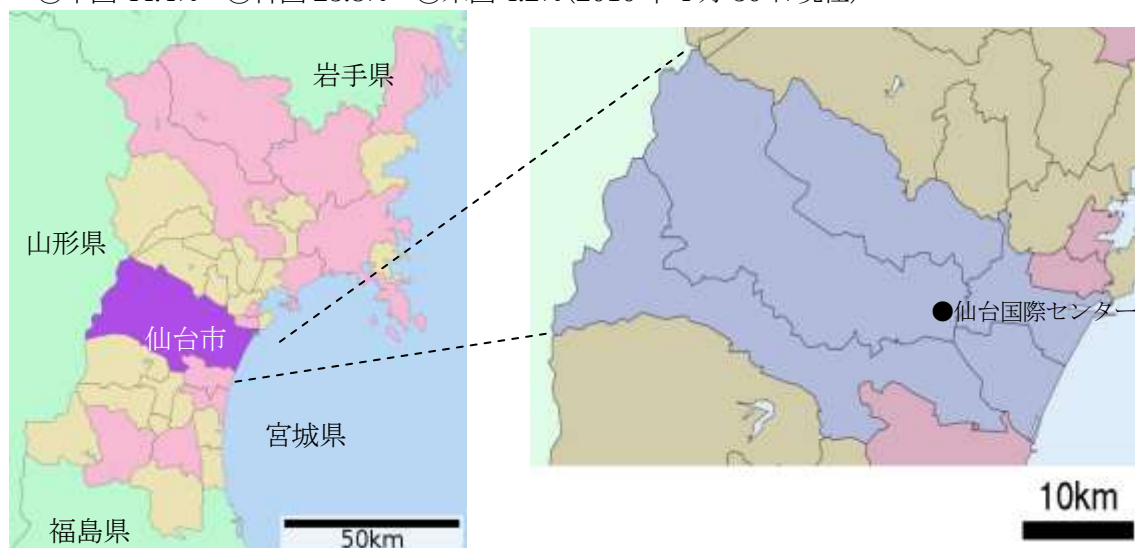
仙台市人口 1,046,654 人 うち外国人登録 10,271 人(2011年3月1日現在)→約1%

・在留資格別割合：

留学生 22.6% ②永住者 19.6% ③特別永住者 14.4%(2010年4月30日現在)

・国別割合：

①中国 44.4% ②韓国 23.8% ③米国 4.2%(2010年4月30日現在)



II. 災害多言語支援センター運営概要

ア 設置期間

2011年3月11日(金)～2011年4月30日(土)・・・延べ51日間

イ 運営時間

【24時間体制】・・・3月11日(金)～3月16日(水)

【9:00～21:00】・・・3月17日(木)～3月19日(土)

【9:00～19:00】・・・3月20日(日)～4月30日(土)

ウ 活動項目

- (1)多言語による情報提供(ホームページ、メールマガジン、ラジオ放送等)
- (2)多言語による相談対応(電話、Eメール、来館)

(3) 避難所等巡回

(4) 大使館、メディア等対応

エ 対応言語

日本語、やさしい日本語、英語、中国語、韓国語、他

オ 人員体制

(財)仙台国際交流協会及び仙台市交流政策課職員に加えて、災害時言語ボランティアや関係機関からの応援を得て運営した。

仙台市災害時言語ボランティア	延べ 184 名
関係機関からの応援スタッフ延べ	95 名
一般ボランティア	延べ 6 名

カ 外部からの協力

(1) 翻訳協力

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター、NPO 法人多文化共生マネージャー全国協議会、弘前大学社会言語学研究室学生チーム、東北大学国際文化研究科

(2) ラジオ収録・放送

エフエム仙台 (Date fm)、ラジオ 3、エフエムたいはく、fm いずみ、特定非営利活動法人エフエムわいわい

(3) 人材派遣

社団法人青年海外協力協会、近畿地域国際化協会連絡協議会、財団法人自治体国際化協会、独立行政法人国際協力機構東北支部、仙台市教育委員会

Ⅲ. 活動内容

(1) 多言語による情報提供

仙台市や関係機関からの情報を、やさしい日本語、英語、中国語、韓国語等に翻訳し、インターネット、ラジオ放送、避難所巡回、外国人コミュニティへの配布等により広報した。情報の主な内容は、被災情報、各種支援情報、ライフライン、交通、原発関連、医療など。

- ・ブログ配信数：日本語 89 回、英語 95 回、中国語 73 回、韓国語 68 回
- ・メールマガ配信数：日本語 85 回、英語 82 回
- ・ラジオ放送日数：51 日間 (開始日と放送時間・回数は局によって異なる)

(2) 多言語による相談対応(電話、Eメール、来館)

・相談件数 1,112 件(51 日間)

・相談内容

第1位 安否情報 479 件

第2位 帰国/国内避難 132 件

第3位 ボランティア活動 95 件

以下 交通、被災情報、原発、生活情報、物資提供、ライフライン、医療、その他

【内訳】

	3/11	3/12	3/13	3/14	3/15	3/16	3/17	3/18	3/19	3/20	～	計
安否情報		114	119	107	26	33	24	14	10	2		479
帰国/避難		6	12	10	14	15	32	19	3	2		132
ボランティア		4	0	7	6	5	8	7	4	3		95
交通		7	7	9	2	0	6	4	3	1		54
被災情報	2	10	15	19	3	0	0	0	0	0		50
原発		0	13	11	4	4	3	0	0	1		37
生活情報					2		2	1	1	1		24
物資提供		0	0	6	1	0	0	0	0	0		16
ライフライン		5	0	6	1	0	0	0	0	0		15
医療		2	1	1	0	0	0	0	0	0		4
その他		14	13	22	7	5	7	9	5	9		206
計	2	162	180	198	66	62	82	54	26	19		1,112

(3) 避難所等巡回

- ・ 期間と回数 3月12日(土)～3月29日(火)延べ55回
- ・ 巡回場所 指定避難所、市民センター、留学生会館、店舗、市営住宅、教会・モスク等 32 箇所
- ・ 活動内容 多言語資料の配布と掲示、状況の聞き取りなど

(4) 大使館、メディア等対応

- ・ 地震発生直後は、各国大使館・総領事館より自国民に関する安否確認や多言語支援センターの支援内容に関する問い合わせが続き、3日後からは帰国支援に関する連絡が多数寄せられた。
- ・ アメリカ大使館は仙台国際センター1階ロビー内に「アメリカ市民サポートデスク」を設置し、帰国支援や相談対応を行った。
- ・ 国内・海外の新聞、ラジオ、テレビ等メディアから取材の申込があり、可能な範囲で対応した。(河北新報、共同通信、西日本新聞、NHKテレビ、北京放送、アメリカ ABC ラジオ、ジャパングャーナル、他)

IV. 震災後の支援と状況変化

【支援とその後の活動】

- 3/11
 - 17:00 FM ラジオ放送(1 回目)
 - 21:00 電話対応開始
- 3/12
 - 避難所巡回開始
 - FM ラジオ放送(4 回目)
- 3/13
 - FM ラジオ放送(5 回目)
 - 電気復旧でパソコン使用可能になる
 - ブログによる情報配信開始
 - 東京外国語大学の翻訳支援開始
- 3/14
 - ガソリン不足で移動が困難になり、ラジオ収録を神戸の FM 局に依頼
- 3/17
 - 24 時間体制解除
- 3/18
 - メールマガジンの情報配信開始
- 3/29
 - 避難所巡回終了
- 4/30
 - 仙台市災害多言語支援センター終了
- 4 月-10 月
 - 外国人被災者アンケート調査実施
- 6 月-7 月
 - 外国人グループへのヒアリング調査
 - および防災オリエンテーション実施
- 7 月
 - FM ラジオ多言語放送(6 か国語)開始
- 10 月-12 月
 - 関係機関へのヒアリング調査
- 11 月-2 月
 - 「多文化防災」モデル事業研究会
- 2 月 12 日
 - シンポジウム「多文化防災の新たな展望」開催

【震災後の状況変化】

- 3/11
 - 14:46 ころ 地震発生
 - 震災により電気、水道、ガスが不通
 - 主な交通機関(バス、地下鉄、JR、高速道路)が不通。普通電話、携帯電話ともにつながりにくい状態に
- 3/13
 - 市内公共交通機関は不通状態
 - 福島第一原発の状況悪化
 - 仙台国際センター電気復旧
- 3/14
 - 福島第一原発 3号機建屋爆発
 - 仙台退避に関する問い合わせ増加
 - 各国大使館による退避バス手配
 - ガソリン不足が深刻化
 - 仙台国際センター水道復旧
- 4/7
 - 最大余震発生、ライフライン一部遮断
- 4/11
 - 仙台国際センターガス復旧
- 4/18
 - 仙台国際センター 開館
- 4/1
 - 仙台市震災復興基本方針 公表
- 5 月上旬
 - 仮設住宅入居開始
- 5/30
 - 仙台市震災復興ビジョン策定
- 7/31
 - 仙台市内の全避難所閉鎖
- 9/20
 - 仙台市震災復興計画(中間案)策定
- 11/30
 - 仙台市震災復興計画策定

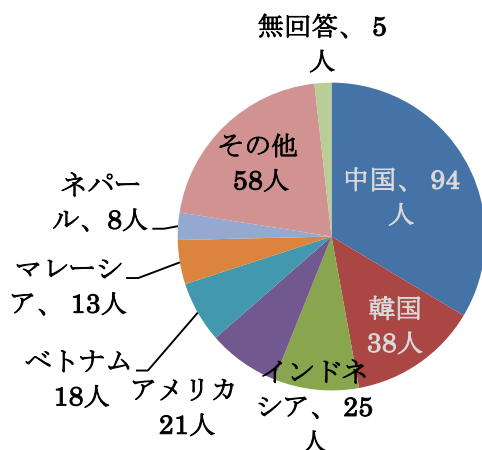
4. 東日本大震災における外国人被災者アンケート 集計結果

1. 実施主体 (財)仙台国際交流協会
2. 実施時期 2011年4月から10月まで
3. 実施目的 東日本大震災で被災した外国人住民を対象にアンケート調査を実施し、震災時の外国人住民の行動や心理状況について把握するとともに、今後支援や情報提供の有り方を検討するため。
4. 調査方法 (1)「外国籍市民懇談会」「生活オリエンテーション」にて実施
(2)外国人コミュニティ/グループに依頼して実施
(3)仙台国際センター来館者を対象に実施
(4)「せんだい地球フェスタ」等イベント開催時に実施
(5)その他
5. 調査言語 日本語、やさしい日本語、英語、中国語、韓国語
6. 翻訳協力 東北大学国際文化研究科(英語、中国語、韓国語)
弘前大学社会言語学研究室(やさしい日本語)
7. 回答回収数 328 有効回答数 282

回答者について

■性別 男性 148名 女性 134名

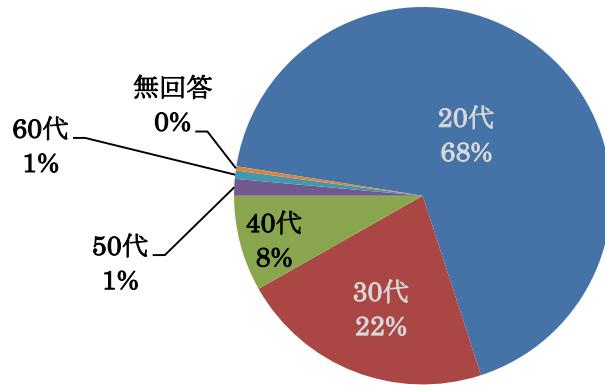
■国籍



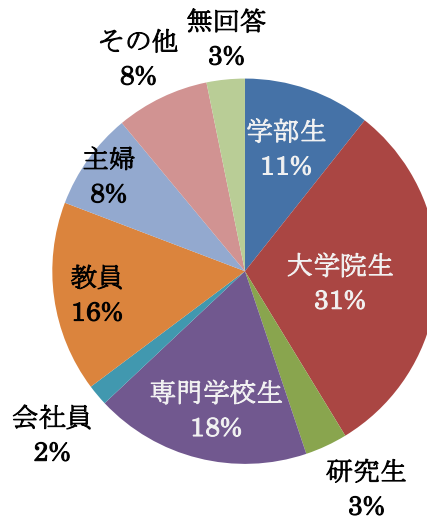
◆「その他」の内訳

- イギリス、カナダ、トルコ…各5人
- オーストラリア…4人
- タイ、バングラデシュ、フィリピン、モンゴル…各3人
- エジプト、スリランカ、台湾、ニュージーランド、南アフリカ、モロッコ、ラオス…各2人

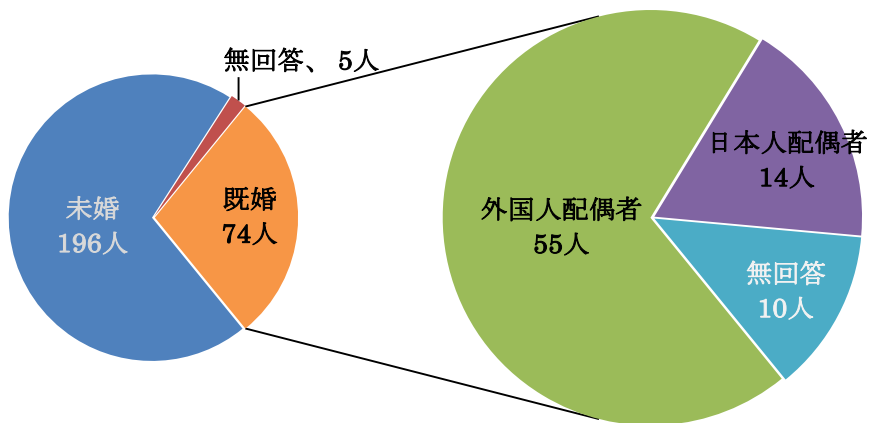
■年代



■職業等

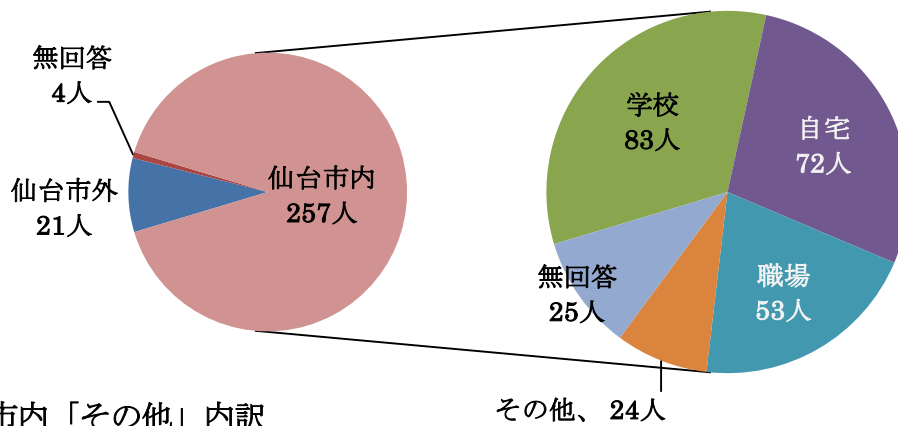


■未婚・既婚、配偶者の国籍



質問と回答

■3月11日はどこにいましたか？



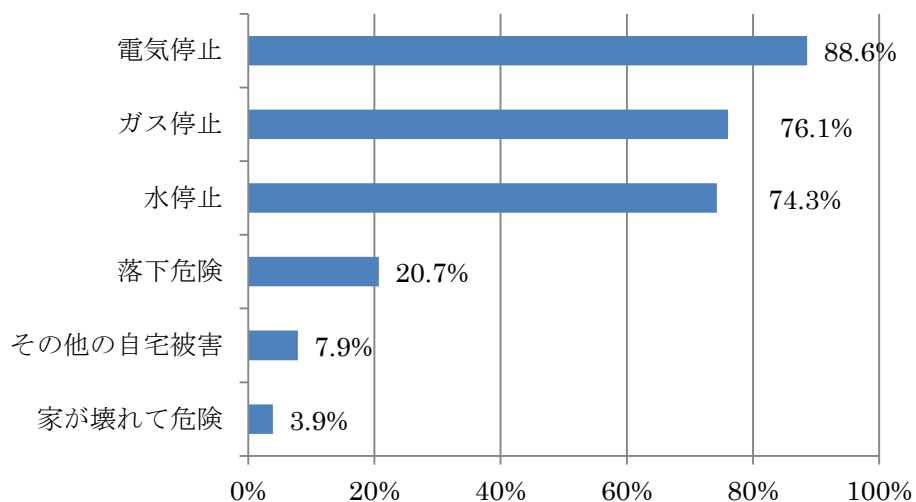
◆仙台市内「その他」内訳

- 6人 街中
- 2人 仙台駅、友人宅
- 1人 青葉区市民センター、区役所、研究室、県庁合同庁舎、新幹線の中、大学図書館、バス、バス停、東仙台、レストラン、野外

◆市外の内訳

- 3人 茨城、東京
- 2人 名取、千葉
- 1人 東塩釜、古川、伊達、山形、埼玉、神奈川、南相馬、名古屋

■自宅の被害は？（複数回答可）



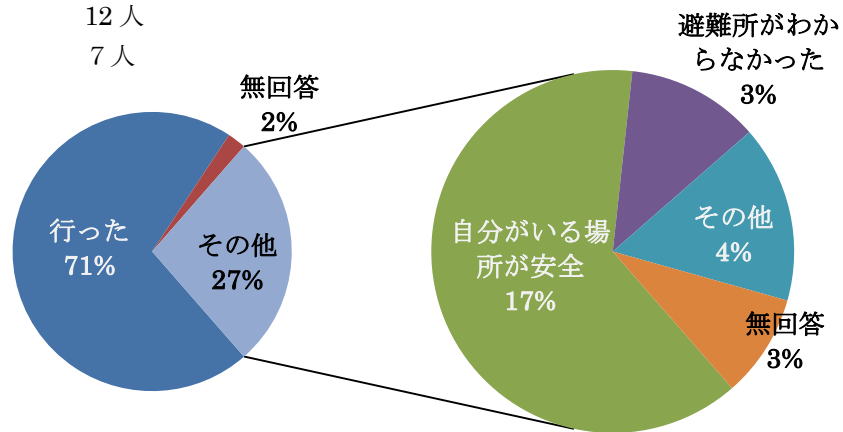
■避難所に行きましたか？

行った 198人
 泊まった 65人
 泊まらず帰った 23人

行かなかった 76人

【理由】

家が安全だった 48人
 わからなかった 9人
 その他 12人
 無回答 7人



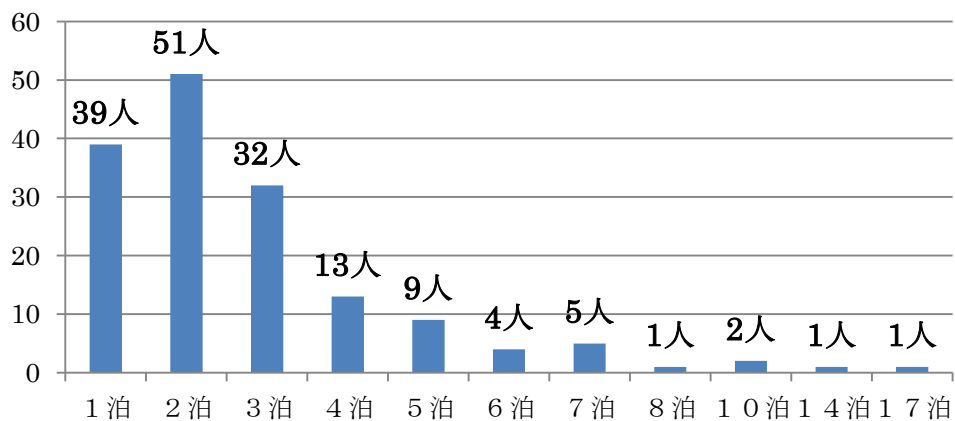
◆避難所に行かなかった理由

- 電気がなくて行けなかった
- 揺れはたいしたことではなかった
- パニックになった人たちがたくさんいるところには行きたくなかった
- 友人宅、先生宅に行った
- 自宅が被害なく安全だった など

◆安全だと思った場所

- 15人 自宅、学校の寮
- 5人 友人・知人宅
- 1人 五橋、大家さんの家、仙台教会、大使館、寺、定禅寺通りのレストラン

■避難所滞在日数



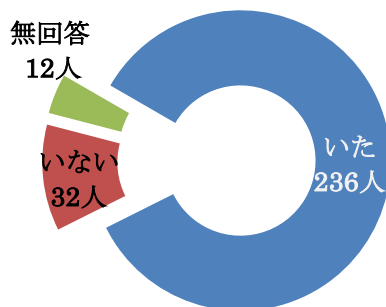
■避難場所

- 22人 三条中学校
- 16人 荒町小学校
- 8人 小学校（名称なし）、遠見塚小学校
- 7人 片平丁小学校、東北福祉大学
- 5人 国見小学校、総領事館
- 4人 若林区役所
- 3人 三沢アメリカ空軍基地
- 2人 荒町市民センター、近所の避難所、川内コミュニティセンター、北仙台小学校、仙台市役所、仙台市体育館、東北大体育館、新潟市体育館、西山小学校、八幡小学校
- 1人 青葉区の小学校、青葉区体育館、ウイスティンホテル、エンジニアリングセンター、折立中学校、学校、上杉山中学校、北六番丁小学校、北仙台、北八町通、ゲストハウス、桜ヶ丘小学校、仙台駅、ホテルロビー、体育館、大学食堂、太白区役所、高砂小学校、立町小学校、東京インドネシア大使館、東北大学病院、通町小学校、中田中学校、七北中学校、西多賀中学校、西山中学校、東仙台、東塩釜あたりの小学校、東二番丁小学校、福島、福室小学校、茂庭台小学校、館高校、友人宅、吉成小学校、ヨハン仙台教会、若林小学校

◆避難所で困ったこと

- 22人 食料・水不足
- 16人 寒い・防寒具がなかった
- 6人 日本語がわからない（情報不足）
- 5人 スペースやプライベートがない
- 3人 電気がない
- 2人 トイレが足りない、シャワーがない
- 1人 グルテンアレルギーで救援物資の食品が食べられなかった
困ったことはあったが、明確にわからない、空気が悪い、埃が多い

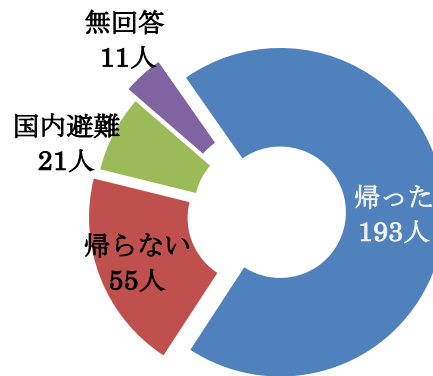
■災害時に頼った人はいましたか？



◆誰に頼ったか？

- 174人 友人・知人
- 51人 先生
- 46人 近所の人
- 45人 家族・親族
- 5人 大使館、領事館
- 4人 雇用主
- 3人 大家、同僚
- 2人 学校職員、ホテル従業員、SIRA
- 1人 三条中学校のインフォメーション、仙台駅のインフォメーション、ホストファミリー、アメリカ政府、寮の職員、近所の学校

■地震の後、帰国しましたか？



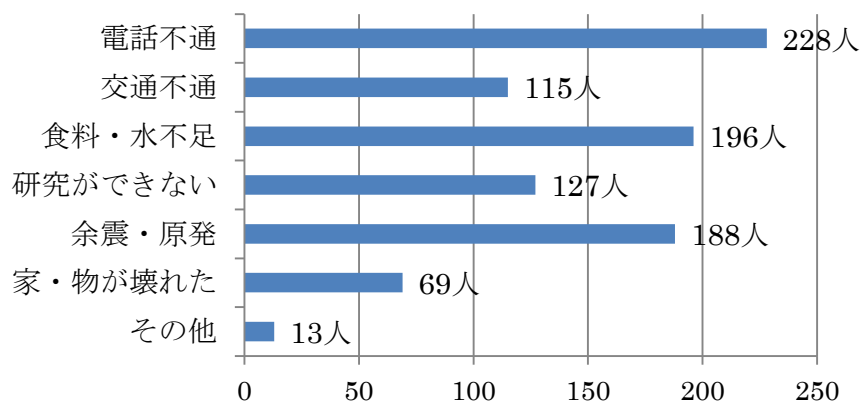
◆帰国した理由

- 母国の家族や友人に心配された 107人
- 原発事故が心配だった 98人
- 政府（大使館）の勧め 71人
- 被害の影響で生活が不便だった 69人
- 地震の前から帰る予定だった 12人
- その他 11人

◆「その他」の一例

- 赤ん坊がいたので、つらい目に遭わせたくなかった
- 病気のため
- 自分がいることで貢献できることは少なく、数少ない資源を消費することがためらわれたから
- 仙台から離れるべきだと思った。国内避難より安く済むと思ったから
- 研究を続けるためには、仙台にはいられなかったから
- 余震が心配

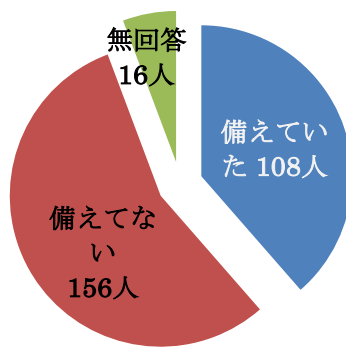
■今回の災害でどんなことに困りましたか？



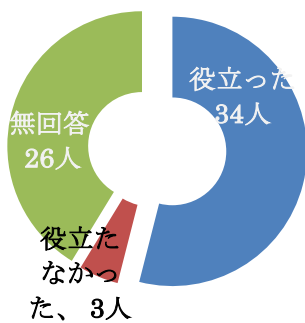
◆「その他」の一例

- 情報不足、原発関連の情報が錯そうしていた。英語の情報がほぼなかった
- インターネット不通
- 携帯電話、パスポートを地震でなくし、5日後になって初めて探すことができた
- 夫が本国に帰っており、頼れる人間がいなかった
- トイレが使えなかった、1週間シャワーが使えなかった
- 海外にいる家族・友人からの圧力
- 病気にかかった

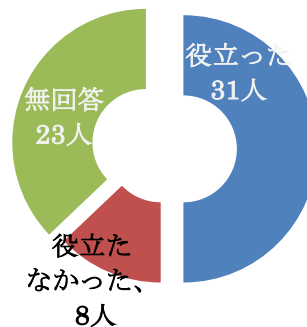
■日頃から災害に備えていたことはありましたか？



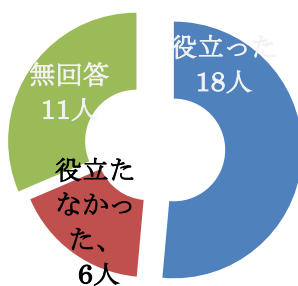
防災訓練に参加した 63人



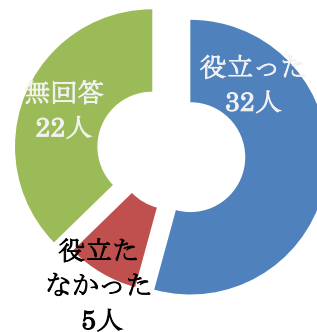
避難所の場所確認 62人



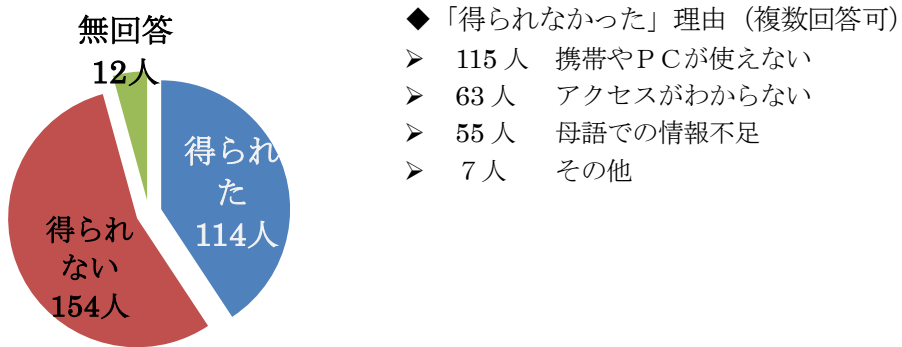
安否確認方法を決めた 35人



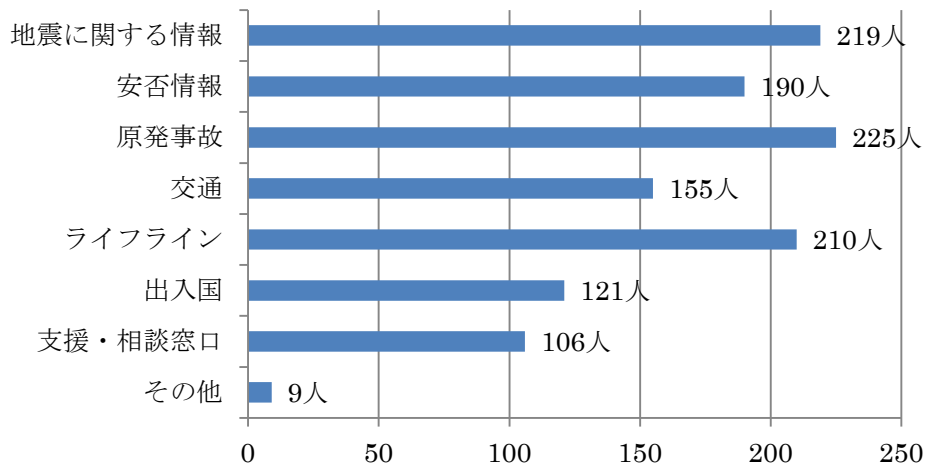
持ち出し袋を用意した 59人



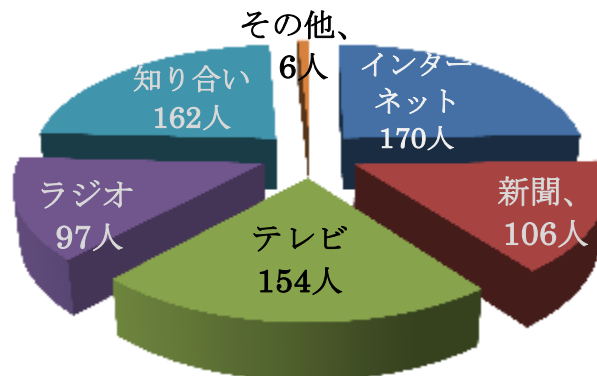
■ 3月11日の当日や翌日に、必要な情報を得ることができましたか？



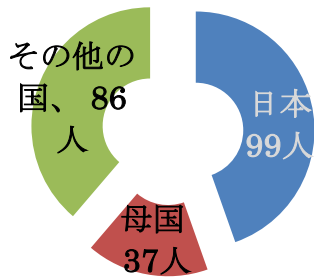
■ 地震発生から1週間程度の間、どのような情報が必要でしたか？（複数回答可）



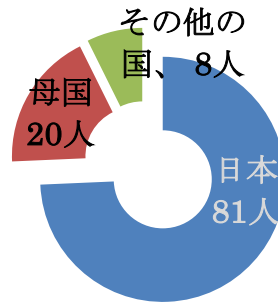
■ 地震発生から1週間程度の間、情報をどのように入手していましたか？（複数回答可）



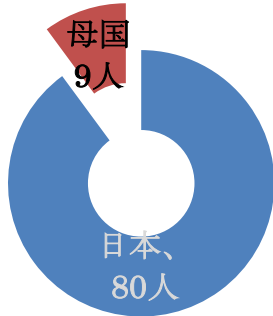
どこのインターネットを利用したか



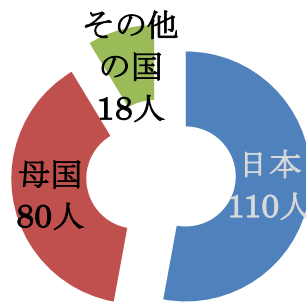
どこの新聞を利用したか



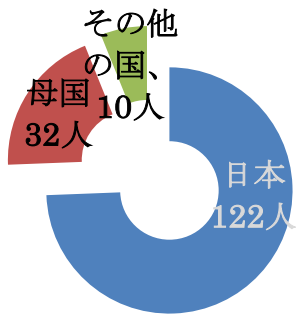
どこのラジオを利用したか



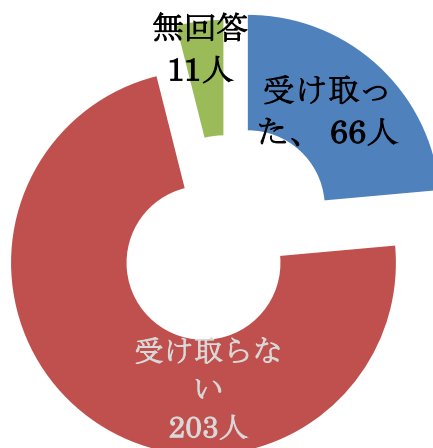
どこにいる知り合いに聞いたか



どこのテレビを利用したか



■仙台市災害多言語支援センターからの情報を受け取ったか？



■今回の災害を通じて感じたことがあれば自由に書いてください。

◆地震・津波が怖かった！生きていることに感謝

- 地震と津波は自然の力がとても激しかった。私は石巻でボランティア活動に参加しました。
- 直接見た石巻は怖い感じがした。石巻の人の生活はすごく大変だと思っています。日本と日本人を手伝いたいと思っています。復興するために、みんなの努力は必要です(ベトナム)
- 地震が怖くて、危ないと思いました(中国)
- 私の家は石巻なので、家は大丈夫だったけれど周りがダメでした。今回の震災でいろいろ 感じましたけれど、自然の力はどうやっても人間の力では防ぐことができないと考えました。早く復旧してほしいです(韓国)
- 食物がなく、夜寝られなかったです(中国)
- 津波が来た時、すごく怖くてもう逃げられなく、人生はこれで一発終わりだと思いました。 1 回目の津波がそんなに強くなって良かったです(中国)
- 人生のいい経験になって、思い出になりました(中国)
- 生きて良かったです！地震の後前より勇気を持つようになりまして、日本の建築にも自信を持つようになりまして、生活の態度が変わりました。今回の地震を乗り越えたら、今後にはどんな困難でも乗り越えられるかなと思います。(中国)
- 生きることに感謝します(スーダン)
- すごくゆれてこの状態でいけていけるかなと思った(中国)
- 3月11日から今までもずっと心配しています(インドネシア)
- 仙台は地震があるとき怖いんです。私は地震が初めてでした(ベトナム)
- 怖かった(ベトナム)
- 地震や津波が起きた、私は大丈夫です。原子力発電所が心配です、それで国へ帰った(ベトナム)
- 津波にあわなかったけど、怖かった(ベトナム)
- 日本にいなかったら、地震ってどんなものかをわからなかったです。そして、今回の事件で日本の発展している国としての強さを感じられました(中国)
- 前は地震に会ったときはあまり怖くありませんでしたが、今は地震が起こるときは怖い気持ちがあると思う(マレーシア)
- 怖くて地震はもうあいたくないです(ラオス)
- 怖かったです。こんな大きい地震は初めてでした(インドネシア)
- 日本に留学してからもう2年間経ったけど、あんな大きい地震を初めて体験したので本当に怖かったです。でもみんなが無事でよかったです(マレーシア)
- 地震が怖かったのですが、人と人のつながりや、人の温かさが今回の地震で感じました(中国)
- 恐れ、決断をする難しさ、心理的トラウマ(ミャンマー)
- 怖いです(中国)
- やっぱり大きな災害の前で、一人の力がすごく弱く感じられました(中国)
- 人生はわからないものだと思います。毎日周りの人を大切にしたいほうがいいです。楽しんで暮らせば最高です！(中国)
- このたびの東北地方太平洋地震により、被災されたところが多かったから、一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます(中国)
- 平成23年3月11日、今生はじめての大地震あったので、本当に不安でした(中国)
- 今回の地震や津波は怖かった。いっぱい日本人が亡くなったのはとても悲しかった。涙が止まらなかった。日本はいい国なのに、どうしてそういうことが起こったのですか。理解できません。外国人が逃げる場所はあるのですが、日本人が逃げるところがないです。かわいそうです(中国)
- 初めての大地震にあって死んでしまうかなと思いました。しかし、日本人の皆様と一緒にいたから、いろいろ教えてもらいまして、何となく落ち着いていました(中国)
- 今後、このような災害が起こらないよう心から願います(中国)

- 親族の大切さをよく実感できた。生と死は本当に一瞬のこと(中国)
- まず心が非常に痛かった韓国にいる家族と連絡ができず大変だった。原発事故の件でいろいろ
- 葛藤したが、世界どこでも同じ状況だと思い、耐えられると思った。今はだいぶ落ち着いた。当時は怖さとおそれにおびえて生活したが、今は少し良くなった。しかしまだ余震が多く少し不安である(韓国)

◆物資も無いし、情報もなく不安だった。非常用の連絡システムが必要だ

- 大好きな日本がこんなひどい目に遭ったのは実に痛ましい。日頃日本人の方々から様々な面でお世話になっていたのに、帰国した時になんとなく日本を裏切った感じがする。自分は被災を免れたのは実に幸運だけど、次いつ来るかわからないので、万が一に備える意識がすごく強まった。将来ずっと日本に暮らしていきたいと思っているので、自然と共生する覚悟をするうえ、災害を未然に防ぐためには今後防災訓練なども参加しようかなと思う(台湾)
- 地震に関する情報の収集ができなく、食物と水がないです。今回の地震が人生の初ですが、その後の余震は多かったですから、慣れてきました。ただ、いつ大きい余震が来るのかわからないです(中国)
- 最初の数日間はほんの少ししか役に立たない同じ情報が何度も繰り返し流れていた。英語の情報少なかった(アメリカ)
- 地震があまりにも大きくて、大学も全然動かなくて、帰ったほうがいいのか帰らなくてもいいか迷いました。また原発のこともあって、いまだに食安全など本当に正しい情報がもらっているかどうか不安が続いています。信頼できる正しい情報が大事だと思いました(中国)
- 3日間避難者の世話をした。彼らの多くは外国人。どこかの人が私たちの学校の電話番号を緊急電話番号としてウェブ上に投稿したため、世界中からの安否確認電話への対応に追われた。
- 多くの先生は英語が話せないから、ストレスをたメールことになった。100km以上離れたところからの電話を受けたりしたが、彼らに対する情報はもとより、自分たちの情報すら十分になかった(オーストラリア)
- 今回の災害を通して、領事館の方で平常時にリストをきちんと確保して、このようなときに迅速に安否確認ができるようにしてほしい(韓国)
- 非常時の連絡システム(情報交換)の重要性、地震対策に対する重要性(韓国)
- あらかじめ受けた教育がとてもためになりました。そして母国語による案内もまた非常に助かりました(韓国)
- 非常時の連絡システムの重要性を切実に感じました(韓国)
- 物資不足で、買い物するときすごく長い列で並びました。いろいろな作業の効率が低く、日本のような発展している国でこういう低効率なことがあってもいいの？(中国)
- すごく怖い経験です。そして、震災後の対応がそんなに良くないと思います。食物と水が足りないです(中国)
- 地震に備える対応が不完全(中国)
- 日本政府が迅速で的確な情報を提供しなかったため、国民・不安が増したのではと思う。隠さず、知る権利がある国民に信頼を与える日本政府になってほしい(カナダ)
- 地震の怖さを切実に感じることができました(韓国)
- 二度と経験したくありません(韓国)
- 地震は本当にまずい事件であり、今私達はもう二度と起こらないように祈願します。地震の日の夜は福祉大学に泊まりに行きました。着いた時、地震に対応するものもう全部用意しまして、本当にありがたいです(トルコ)
- 避難所ではもっと多い水、食物や薬を備えたほうがいいです。外国人に避難所の場所と行き方を説明したほうがいいです。また、避難所の様子を確認するため、パトロールする車を用意した方がいいです。こうすると、避難所で何かが起きたら、早めに知れるはずですよ(中国)
- 地震予報がないです！(中国)
- 周りの人々から話を聞いてみると仙台市災害多言語支援センターが役に立ったと思われる。いつまた災害になるかわからないため、多言語支援センターのPRをもっとしてほしい(韓国)
- 少なくとも英語の情報は入手可能であるべきだ(インドネシア)
- 外国人に対する支援を強めてほしいと思います(中国)

- 対応が遅い(韓国)
- 被害のある国のメディアは信用できないこと(韓国)
- 災害に関する英語情報(インドネシア)
- 子供やとくに赤ちゃんに対する備えが重要(マレーシア)
- 非常に怖かった。これから非常時の準備を徹底し、もう1度地震が起きる場合には、上からの指示に従って速やかに動くようにしたい(韓国)
- 2、3日してからはたくさんの情報が入手可能になったように思え、多くの人が互いに助け合っていた。しかし、日本語の話せない人や家族のいない人にとっては大変だった(アメリカ)
- 水と電気がなくて生活が大変だった(韓国)

◆原発問題や次の地震に関する詳細情報が必要

- 避難所に十分なガス・水・電気・食料が必要。より多くの原発問題や次の地震に関する詳細情報が必要(インドネシア)
- 食べ物への放射線被害の調査が不十分。MITIや宮城県のウェブサイトもこれに関するデータを提示していない。人参やお米などはまだ食べられない。産地が書いてある包装のラベルに従う(信じる)のは少し難しい(タイ)
- 地震や津波は怖いと思っているが、もっと怖いのは福島原子力発電所のことです。目に見えない放射線が怖くて一時帰国しました。これから1番心配する放射線のこと、また発電所の事故を収束できるように祈っております(中国)
- 原子炉の放射線レベルに関する情報が明確ではない(バングラデシュ)
- 原発事故に関する情報をもっと公開しなければならぬと思いました。外国人の私たちはほとんど母国に帰りました。地震を怖がっているのではなく、原発事故ほどの程度まで深刻だったのかについての情報を全く把握できず、あわてて、結局何もできなかったのです(中国)

◆普段から災害に備えること、防災訓練に参加することが大切だ

- 地震の演習にたくさん参加して、普段に食物を用意して、万々に備えることが大事です(中国)
- 地震演習をたくさん参加するようにしておきたいです(中国)
- これから、食物をきちんと用意するようにしておきます。地震の時結構おなかすいたですから。夜は真っ暗。学校の協力はそんなに多くない。自力で避難所とかで水・食料を探さないといけない(中国)
- 地震後いろいろな問題が出てきて、例えば食物がなく、通信と交通など(中国)
- 外国人の場合、地震等の災害時は日本人と一緒に行動した方が一番安全だと思う(韓国)
- 今回の地震は人生初ですので、すごく驚いた。ただ、これで地震が起きたら後どうすればいいのか知るようになりました。例えば、地震に備えが大事とわかりました。地震の時、携帯が通じなく、家族と連絡を取れなかったです。住んでいた学校の寮にはテレビがなかったですので、地震に関して情報を全然知らないです。そして、必要な情報をわからないため、避難所の場所と行き方を全然わからなかったです。学校側は学生を放置するように無関心な状態だったです(中国)
- 最初の段階で何をすべきか知らなかった(中国)
- 今回の地震に対して、心を痛めた。でも周りの方々に協力をしてもらいながら、何とか乗り越えた。これから被災者に何か役立つことをしてあげたい。今回の地震を通して、地震に対する準備をした方がいいと思った(中国)
- 地震の演習が大事だと思います。身分証明書や貴重品は普段に取りやすいところを置くようにした方がいいです(ベトナム)

- もうこんなことが二度と起こってほしくない。私の考えや祈りが地震や津波の影響を受けた人に届くといい(韓国)
- 地震に関する防災準備が必要です。水・食品・ラジオ・身分証明書のコピーとか。電話会社によって電波があるかどうか違うらしい。それは不便です(中国)
- 最初はこんなに大きな地震だと思わなかったけど、結局こんなにひどい被害だったことにびっくりしました。やっぱりどんなことでも油断しないで、準備をしなければならないです。一日も早く復活するようにここから願っています(中国)
- もし余震が起こったら、水・食物とガソリンおよび薬品と日常の生活用品を常に備えたほうがいいと思う(中国)
- 今回の災害を通じて、以前はただ映画やテレビにだけ見た光景が身近で起きていたから、日頃から災害の備えていて非常用の持ち出し袋を準備したり、住いの近くに避難所があるかを確認したり、しなければならないことを感じました(中国)
- 人と人の助け合いは大切だと思った。普段、当たり前だと思って使っているもの(水・電気・ガス・食べ物)はもっとも重要だと実感した(中国)
- 食物は日頃からためておく習慣をつけなきゃと思いました。また、重要なもの、例えば携帯電話・充電器・パスポート・財布などは身の回りに置くことなど、注意すべきことが多かったと思います(中国)
- 今回の地震が起きた。何も準備しなかったので大変かったです(タイ)
- 今回の地震の中で、私はパニック状態に陥った外国人女性の様子を目撃したが、災難の前でみんなは一致団結してともに難関を乗り越えるべきだと思う。互いに愛し、国籍を超えて親族のように励ましあい、面倒を見る。一外国人として国にいる親戚からの心配を感じたとともに、日本人の間の親切さも実感できた(中国)

◆日本社会と日本人について

- 震災以来、外国人であることへの強い反感を経験した。私の同僚は私が大使館の助言を受け入れることや、東京の大使館を訪れることに対して露骨に反対の意を表した。
- 今回の東日本大震災があって、怖かったけれど日本人とともに頑張ってあきらめなくて、続けて日本で勉強している(ベトナム)
- 日本は地震が多い国のため、対策がよくできていると思った。ある程度おさまったと思われる状態でもすぐに電気・水道・ガスの配給がなされなかった点においては、日本人の慎重さを感じることができた(韓国)
- 日本人はすごく秩序的で、うまく組織しました(中国)
- 良い人生の経験になりました。買い物をするとき、ガソリンを入れる時、すごく秩序的だったです。その例外今回の地震で中国人の信譽が前より低くなってしまった。地震で帰国しましたが、日本に戻ってきたらアルバイトが無くなって、新しいのはまだ見つからないです(中国)
- 地震が怖かったですが、いろいろな人に(例えば学校の先生)援助をもらって、すごく感動して、心温かかったです。日本が早めに復旧できるように祈願します(台湾)
- 普段あまり面識のなかったお隣の方々と互いに助けながら生活したことが大きな支えとなった(中国)
- 地震はとても怖いけど日本人は優しく親切。また秩序がしっかりしているので大丈夫(中国)
- 震災にもかかわらず、都市が機能していてうれしい驚きだった(カナダ)
- 日本、頑張れ!
- がんばってください(中国)
- 初めて体験したが、家族全員無事で安心した。みんなの気持ちが一つになって感動した。すごく勉強になった(中国)
- 日本の方々にお世話になりました。ありがとうございました(マレーシア)
- 日本人の精神が素晴らしいと思った。なぜなら、大変な状況でも冷静に行動したから(ベトナム)
- 日本人は親切だった(中国)
- 地震の時でも、ちゃんと行列立っている日本人のマナーがすごいと思った(中国)
- 日本人が本当にすぐくて地震に遭っても、ちゃんとルールを守って避難したし、中国だったらやばいかも(中国)

おわりに

本報告書に記載のとおり SIRA は東日本大震災発生直後から「仙台市災害多言語支援センター」を、仙台市災害時言語ボランティアや関係機関等との協働で 51 日間にわたって運営しました。4 月 30 日に仙台市災害多言語支援センターの運営を終了し、5 月の大型連休を迎えた頃には、多くの留学生らが学校等の再開にあわせて仙台に戻り、再会を果たせて安堵したことが思い出されます。

仙台市災害多言語支援センターの運営終了後、SIRA では年度当初から計画していた各事業を実施するとともに、東日本大震災での活動の振り返りを SIRA スタッフ、仙台市災害時言語ボランティア、関係者と行ってまいりました。本事業『『多文化防災』の協働モデルづくり』も、関係者との振り返りの一環として位置付けられます。

その振り返りのなかで関係者の方々のお話を聴き、震災のなかでも多くの方々が無言に地域を支える姿が改めて見えてきました。言うまでもなく、地域を支える方々に日本人／外国人の別はなく、お話の一つひとつが「多文化防災」を考えるうえで貴重でした。

本事業は 2011 年度でいったんの区切りとなりますが、今後の取り組みこそが「多文化防災」の本番であると言えます。シンポジウムでの板橋恵子さんのお話にもありましたとおり、被災された方々のご経験を無駄にせず、今後の災害に備えることが大切です。SIRA でも本事業で話し合われたことを実践につなげて行きたいと存じます。

なお、災害時の情報提供のあり方については本事業の検討課題の対象外としましたが、2012 年度に検討したいと考えています。

最後になりましたが、本事業にご協力いただきました市民団体や関係機関の皆様をはじめ、お忙しい中シンポジウムにご参加くださいました皆様に対し、心より感謝申し上げます

「多文化防災」の協働モデルづくり 事業

主 催： 財団法人仙台国際交流協会（SIRA）

担 当 課： 企画事業課（担当者：企画係主事 菊池哲佳）

実施期間： 2011年11月1日～2012年3月30日

※本事業は、財団法人自治体国際化協会（CLAIR）の助成を受けて実施しました。

「多文化防災」の協働モデルづくり 報告書

発行日 2012年3月30日

編集・発行 財団法人 仙台国際交流協会

〒980-0856 仙台市青葉区青葉山 仙台国際センター内

Tel: (022)265-2480 Fax: (022)265-2485

plan2@sira.or.jp <http://www.sira.or.jp>

（財）仙台国際交流協会は仙台国際センターの管理、運営を行っています。
